第２部

■パネルディスカッション

松村秀一氏（ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ）×
西村浩氏　×伊藤香織氏×渡和由氏

松村　では、皆さん、これから第２部ということで、よろしくお願いします。

私はかなり門外漢なので、「何だ、あいつは」「松村？　誰？」、そんな声が聞こえてきますけれども、広場にいさせたら、カプチーノではなくて、ビールを飲んで何時間でもいられる、そういう松村と申す者です。

実は今日のこのシンポジウムというのは、今、ご紹介がありましたように、今まで９月から３回ほど、関連するシンポジウムをやってきて、最後にヤン・ゲール先生に来ていただいて、そのお話を受けつつ、受けられないところもあるかもしれませんけれども、全３回のシンポジウムのまとめ及び相互に深め合うという感じでしょうか。

客席の中に、今までの３回のうち、１回でも来たことがある方はどれぐらいいらっしゃいますか。ずいぶん熱心な方々で、半分以上はまだお聞きになっていないということですね。

お手元にこういうものが配られております。これを広げていただくと、こちらは目を休めてくれということになっていまして、こちら側に３回が何だったか、どういうメンバーでやったかというのを書いています。今からそれぞれ簡単にご紹介いただきますけれども、司会のほうで少しタイトルだけでも言っておきます。

最初に西村さんがモデレーターをやられていたのが「ストック活用時代のリノベーションまちづくり」。建物がそれほど建て替わらなくなって、空き家も増えてきた。そんな時代にあって、それをどう活用しながらまちづくりするかということですね。これについて、アフタヌーンソサエティの清水義次さんと、三菱地所顧問の松井直人さんというお二人を迎えて、西村さんとやった。これが１回目です。

２回目が、伊藤香織さんですね。すみません、伊藤さんだけフルネームで呼んでしまいましたけれども。「状況やアクティビティをデザインする」というタイトルで、伊藤さんにモデレーターをしていただきました。マーケティングリサーチャーの三浦さんと、黒﨑さんというお二人。都市計画とはまた少し違うところから、いろいろなまちにおける、あるいは都市におけるアクティビティを考えて仕掛けていらっしゃるような方と伊藤さんとでやっていただきました。

最後の３回目が、大量に椅子を買い付けることで有名な筑波大の渡先生。そんなに椅子を買っていたかと。さっき聞いていて、「どんだけ買うの？」というぐらい買っていらっしゃいますけれども、その渡先生がモデレーターをやられて、ハーツ環境デザインの鈴木さんと、それから、日本大学にお勤めの三友さんというお二人で、タイトルは「賑わいや居心地良い空間をデザインする」。

今から、それぞれこの３回、かいつまんで言うとどういうことだったかと、これを聞けば、全３回来ていなくても、情報量的にはほぼ 100%行くと思いますので、素晴らしいモデレーターのまとめを、10 分ずつお聞きしたいと思います。よろしくお願いします。

西村　まず１回目は「ストック活用時代のリノベーションまちづくり」というタイトルで、9 月 3 日に 3331 Arts Chiyoda で行いました。

ストック活用時代の
リノベーションまちづくり

2014.09.03 @3331 Arts Chiyoda

10 分で話せというのがそもそも僕は無理だと思うのですが、一生懸命話したいと思います。

この回は、私がもともと課題を持っておりまして、このプレイスメイキングという内容が非常に盛り上がっている。日本でも同様に、人に注目をして、使い手側から物事を考えていこうという流れはムーブメントとしてもう来ていると思うんですね。ただし、今日、お話をきいていてちょっと腑に落ちないところがあるのは、これをどうやって都市問題とつなげていくかということをちゃんと考えていかなければいけないと思います。何かイベントをやって盛り上がっているだけでは駄目だし、それが一時的であっても駄目だ。日本固有の都市問題の解決にこのムーブメントをどうつなげていくかということを、実は１回目には少し議論をしたかったというところがありました。

人口減少
超高齢化
労働力人口の減少

日本固有の都市問題、人口が減っている、超高齢化をしている、労働力人口が減っている、都市がシュリンクしているという状況の中で、どういうふうにまちづくりを考えなければいけないかということがあると思います。

空き家総数：820万戸

空き家率：13.5%

何が起こっているかというと「ストック活用」というだけあって、空き家総数が 820 万戸で、空き家率が 13.5%も日本の都市にはあります。

さらに、空き家率というと 13.5%と出ますが、実は空き家がなくなって更地になると空き家の母数にならないので、空地という観点でいくともっともっと空いているわけですね。

今日、前半で見た事例が、ちょっと腑に落ちないというのは、ほとんど大都市圏なわけです。大都市圏でああいう活動をするということは、たぶん、人は集まると思うんですね。なぜかというと、公共交通もありますから、車をとめてもたぶん代替交通機関がある。ところが地方都市だと、車しかないんですね。そこの中で、このプレイスメイキングをどうやって活用していくかということをきちんと議論したいなと思ったのが１回目でした。

こんな感じですね。いつもは書いているんですけれども、どことは消しました。もう１枚、出します。こんな感じですね。どこに行ってもこんな感じです。

ここからどうやって地方都市を救うのかというところが、おそらく東京もこういう方向に既に向かっていると思うんですが。今、僕は地方都市がトップランナーだと思っていて、ここでプレイスメイキングという手法を使って地方都市の問題を解決できれば、東京でもうまくいくと僕は思っています。

コンパクトシティ
実現可能か

よくいわれているのがコンパクトシティ。これが本当にできるのか。これが１回目の議論の中の一番のテーマだったと思います。

松井直人 松井直人
×
清水義次 清水義次
×
西村浩 西村　浩

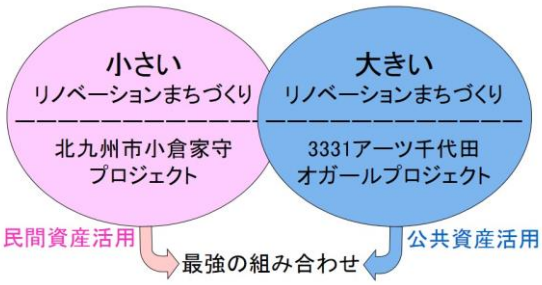
そこで、松井さんと清水さんと私という３人でお話をしました。後ほどアイコンが出てきますが、誰が言ったのかということを示しています。

小
リノベーション
×
まちづくり
大

「リノベーション」と「まちづくり」というキーワードになっていますが、実は、この２つが重なり合っているところが非常に大きな意味を持っています。なぜかというと、リノベーションというと、すごい小さな小さなお話です。それをいかに大きな大きなまちづくりに、都市再生につなげていくか、この組み合わせをどうやってつなげていくかというのが、おそらく僕はプレイスメイキングという手法がすごく有効に働くのではないかという仮説を持っています。

清水義次 リノベーションまちづくり

リノベーションとは、今あるものを活かして新しい使い方をすること



これは清水さんのスライドですが、清水さんに最初にお話をいただいたときに、この話をしていただきました。小さいリノベーションまちづくりと大きいリノベーションまちづくりを掛け合わせてやっているんだと。小さいのは民間資産活用で、大きいのは公共資産の活用だ。この２つを重ね合わせれば最強の組み合わせではないかということで、紹介していただきました。

清水義次 北九州市小倉魚町周辺エリアの民間不動産をリノベーション

- 2010年7月　小倉家守構想（都市政策）づくりから開始
- 2011年6月　リーディングプロジェクトオープン
- 民間自立型まちづくり会社が5つ誕生

↓

- 現在までに14プロジェクトがオープン
- 300名超の従業者（大半が新規起業者）増加
- 魚町3丁目の歩行者通行量3年で3割増加

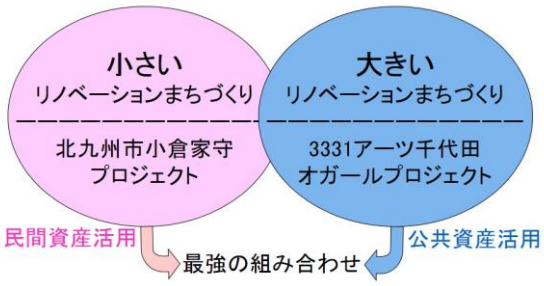
清水義次　15年間空き店舗だったスペースをリノベーション

メルカート三番街　個性豊かな10店舗が 2011.6.1 オープン

小さいほうが北九州の小倉の魚町周辺のリノベーションです。民間不動産を使ったリノベーションで、1 つの大きな不動産が空いているんですが、そこを小さく分割して、たくさんのアクティビティを活動する方々を集めて、ここに書いてありますように、既に 300 名を超える従業員の方々、新規雇用が生まれていて、歩行者通行量も 3 割増加しているということをこの小さい町の中で動かし始めているということが起こっています。メルカート三番街、こんな感じで、たくさんの人たち、若い人たちが集まって活動し始めたという現象が起こっています。

清水義次 リノベーションまちづくり

リノベーションとは、今あるものを活かして新しい使い方をすること



清水義次 オガールプロジェクト　岩手県紫波町

公民連携事業で町有地（10.7ha）を再生し、まちの中心をつくる

もう一方の大きいほう、公共資産活用のほうで清水さんがやられているのが、オガールプロジェクトです。有名は公民連携で広大な町有地を活用して、人が集まる拠点をつくるということを、民間の力を活用しながらやっているということです。

清水義次　左：オガールプラザ　右：オガールベース

2012年6月オープン　真ん中がオガール広場　2014年7月オープン

オガールプラザの雁木空間（幅4m）

左がオガールプラザという施設で、右側がオガールベースという宿泊施設です。真ん中に広場があるという構成になっています。雪国ですから、ここに雁木みたいな空間があって、いかに建築物と広場みたいなものとの境をなくして、アクティビティをこういうところに集めてくるかということを考えられている。

オガール広場の芝生でくつろぐ地元の小学生たち

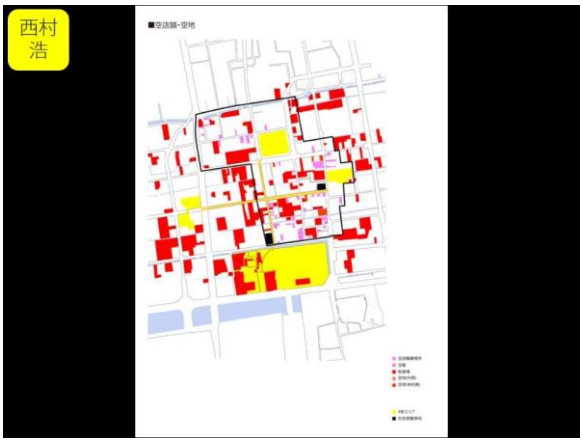
さらに広場には子供たちがこうやって集まってくるということが起こっている。夜になるとこういうワインガーデンみたいな、お酒を飲みながらご飯を食べるという現象が、ここの紫波町という、人口がたしか2万数千人ぐらいの町に起こっているという状況があるそうです。

オガール広場を使った　オータムワインガーデン

　続いて私がお話をしまして、私はふるさとが佐賀ですが「わいわい！コンテナプロジェクト」というのをやっています。僕は21世紀型のコンセプトだと言っているんですけれども、空き地が増えるとまちが賑わうというキーワードでやっています。

空き地が増えると街が賑わう?!
佐賀「わいわい!!コンテナ」プロジェクト

今までは、20世紀は空き地が出てくると、それを床で埋めようという方策で、何とか都市を再生、維持してきたんですが、今からそれをやっても、人口が減っていく、パイが減っていくわけですから、おそらく空きビルが増えるだけであろうということで、仮説として、空き地が増えればまちが賑わうという発明は何だという社会実験をここでやっています。簡単に言うと、芝生を張って、デッキをつくって、海上コンテナを使って、中にどんなコンテンツがあれば、土日のイベントではなくて、月から金の平日の昼間に少しでも人が来るようになるのかという社会実験をやっています。



佐賀のまちの中の状況はこんな感じで、赤いところが全部、青空駐車場です。最初申し上げたように、車社会です。公共交通機関がほとんど充実していないですから、車で来るしかない。だから、空き店舗になると、どうしても駐車場になるというのは、土地のオーナーにとっては当たり前の現象なわけですね。

　ただ、これを断ち切らない限りは地方都市の再生はないというふうに思っていて、「わいわい！コンテナ」という実験をしています。

これは2カ所目です。2カ所目は、横にクリークという水路があって、分棟式でコンテナをつくってやって

います。

結果的には、夜の飲み屋街になりつつあるまちに子供たちの声がするようになっています。子供たちが来るようになると明るくなる。明るくなって、お母さんたちが集まってくると、その後に、買い物をして帰るという商業の動機につながっていくという現象になっています。

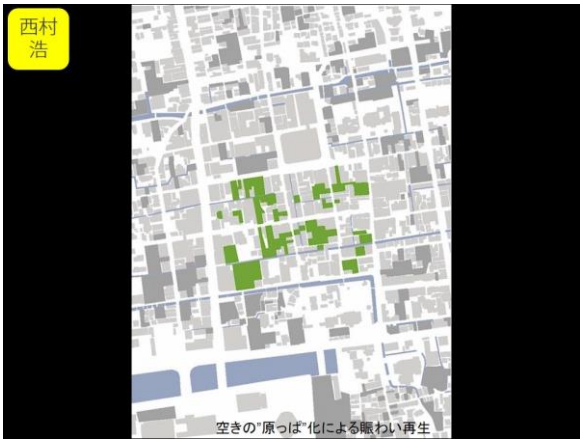
これは今年の夏です。こうやって子供たちが遊んでいました。お母さんたちもこういうところに集まって、おそらく子育て世代の悩みとかの話をしているんですね。そうすると、まちなかに住めるね、住みたいねという話が少しずつ動機として起こってきて、初めてまちなか居住という話につながっていくと思うんですね。決してマンションをつくれば済むというわけではなくて、住みたいという物語をどうやってつくっていくか、状況をつくっていくかというのが、おそらく地方都市は大事なのかなと思っています。

松井直人　清水義次　西村浩

「空き」の価値を考える

空き地のマネージメント

これは3人がみんな共通で言いました。これからは空きの価値を考える必要がある、空き地のマネジメントを考えていく必要があるということを言っていました。



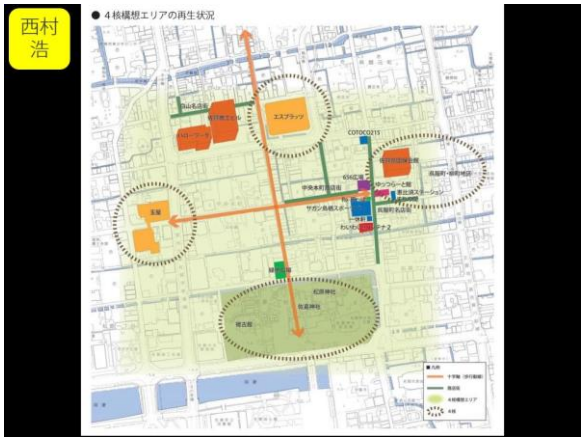
私が出したのが、佐賀のまちなかで濃いグレーのところが全部青空駐車場です。都市再生のイメージとし

ては、この中央部だけを全部原っぱにしていきましょう。これはいろいろな規制のルール、禁止ルールがある公園ではなくて、地域で見守りながら、暗黙のルールのある原っぱという状況をつくっていくというお話をしました。

西村浩

まちの中にみんなで子供たちを集めてどんどん芝生を張っています。実はさっきのパンフレットの裏の芝生のあれは、実際に佐賀で張った芝生の写真です。それを使っていただいて、実は芝生にしていただいています。

西村浩



今、ここのあたり、すごい集中的にいろいろな現象が起こっていて、ここにいろいろな人たち、若い人たちがお店を出す人が集まるような状況が生まれてきています。

西村浩

これがそこの商店街の風景でした。4 年ぐらい前です。

西村浩

ここから商店街が破産をして、アーケードを撤去するとこうなりました。この廃墟の状態から、今、どうなっているか。

西村浩

4 年間で、今、ここまで行っています。コンテナができて、ラーメン屋ができて、サガン鳥栖のスポーツバーができて、それに寄ってくる若者の T シャツ屋さんとか、ファブラボとか、そういう人たちがどんどん、実は、「あそこ、変わってきたね」ということで集まってくるようになっています。

松井
直人

コンパクトシティ

公共交通機関・自転車・徒歩を移動手段の中心とした
集約型のまちづくり

こんな状況の中、松井さんのほうからコンパクトシティという大きな話をしていただきまして、やはりおっしゃっていたのは、公共交通機関、自動車、徒歩を移動手段とした集約側のまちづくりなんだ、やっぱり車じゃないよということをおっしゃっていました。

松井
直人

都市とは何か？

「都市は、多様性が自然発生的に起こる場所であり、あらゆる種類の企業や、アイデアの孵化装置である」

ジェイン・ジェイコブズ
「アメリカ大都市の死と生」(1961)

「何か」が起きるためには、
人と人が触れ合わなくてはなりません」

エドワード・グレーザー（ハーバード大学教授）
「都市は人類最高の発明である」(2012)

33

そしてこのテーマを出してもらいまいた。要は都市は多様性があるべきだと。働く場所だけではなくて、住む場所でもあるべきだし、いろいろな業種の人たちが集まってこなければいけない。そして車を置いて、ゆっくり歩いたりすることで、人と人がコミュニケーションを取るような環境をつくっていくのが大事なんだということを松井さんのほうからおっしゃっていただきました。

松井
直人

コンパクトシティ

公共交通機関・自転車・徒歩を移動手段の中心とした
集約型のまちづくり

人間中心の街
＜人がいるところに人が集まる＞

そこで、このコンパクトシティに対して、人間中心のまち、人がいるところに人が集まるという状況をつくるのがこれからじゃないかということを、松井さんのほうから言っていただきました。

松井
直人

線引型から誘導型へ

プレイスメイキング

そして、松井さんがおっしゃった一番大事なことは、これまでの都市計画というのは線引き型だった。要は、拡大する時代には、ぐるっと線を引いて、広がっていくところに線を引いていけばうまくいっていたんですね。ところがこれをシュリンクして、真ん中に集約していこうというときに、じゃあ、ぎゅっと不動産を投げ捨てて、真ん中に来るかというと、絶対そういうことにはならなくて、「真ん中に行きたいね」というモチベーションをつくっていくことが大事なんだと。これが誘導型だということで、僕はここにプレイスメイキングという手法が有効であると思っています。

松井直人 清水義次 西村浩

道路と駐車場

（25%）　（20%~30%）

50%以上の空間を車が占拠

3 人とも共通で申し上げたのは、道路と駐車場を何とかしろと。なぜかというと、地方都市では、道路が全体の土地面積の 25%を占めていて、駐車場が 20～30%を既に占めています。すなわち、地方都市では、もう 50%以上の空間を車が占拠していて、ここをいじらずに地方都市の再生をやろうと思っても、到底うまくいかないことは目に見えているわけですね。

清水義次

公も大きな不動産オーナーである

松井直人 清水義次 西村浩

公民連携 パブリックマインド

清水さんは、こういうことになると民間だけではなくて公共も大きな不動産オーナーであるということをおっしゃって、ここに公民が連携をして、パブリックマインドを持った人たちがたくさん出てくることが、これからの都市再生については必要ではないかということを言っていました。

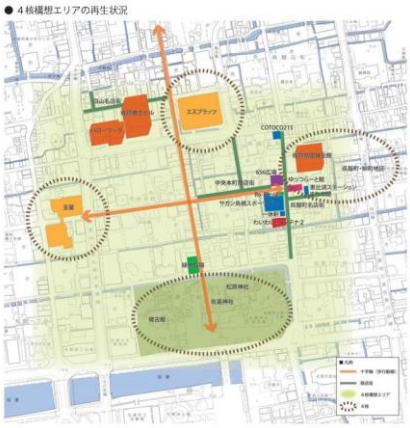
清水義次

敷地に価値なし エリアに価値あり

そして、清水さんは「敷地に価値なし、エリアに価値あり」ということをおっしゃっています。一戸一戸の民間オーナーの敷地なんかには価値がない。ただ、それが集合体となって、そのエリアの価値を盛り上げていけば、その地域はものすごく価値が上がっていって、そこに人が集まるんだという話をしていただきました。

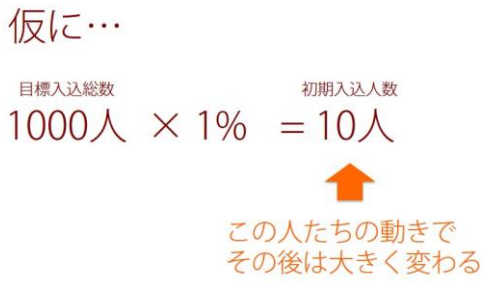
　そして、最後にまとめとして、私のほうから「たまねぎ戦法」というのをいつも申し上げているんですが。こういうところ、ちょっと笑ってもいいですよ。

西村浩

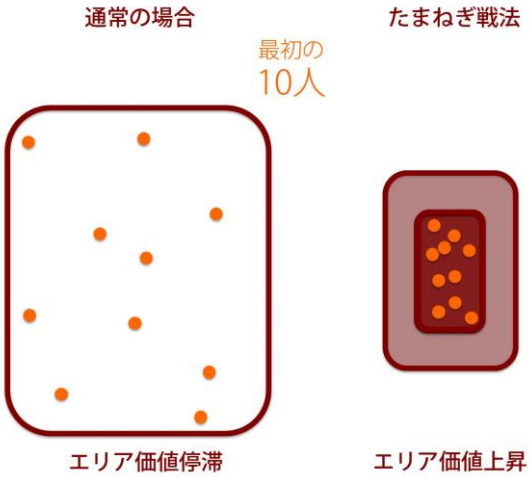


なぜかというと、活性化しなければいけないエリアというのはすごく広いんですが、今、佐賀のまちなかはここだけが盛り上がっています。実はたまねぎの芯だけに集中的に民間の人が傾注して努力をしています。

西村
浩



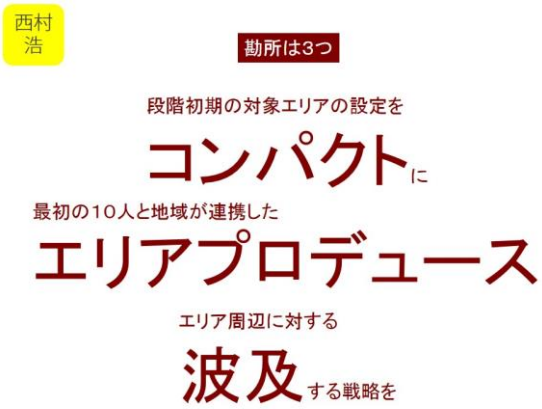
なぜかというと、仮に 1000 人の人がこのまちに来てほしいと思ったときに、「最初に来てください、商売しませんか」と言って、動くのは、おそらく 1%もいればいいほうだと思います。そうすると、何人かというと、10 人しかいないんです。この 10 人が最初にどう動くのかで、まちの状況は大きく変わるわけです。



なぜかというと、通常の場合とたまねぎ戦法の違いは、最初のエリア設定の大きさが違います。中心市街地活性化基本計画なんか、こんな大きいわけですね。ここに最初に 10 人が来ましたと。そのときにどういう動きをするかというと、こういう動きをするわけです。そうすると、エリアが広いほうは全くエリアの価値が上がらないわけですね。盛り上がっている気がしない。ところが小さいエリアでできるだけコンパクトにすると、そこの価値は濃厚に上がっていくわけですね。そうすると、その周りのエリアの価値が上がって、ここにまた人が来る。これが波及していくことで、実は、コンパクトシティという姿が再生されていく。

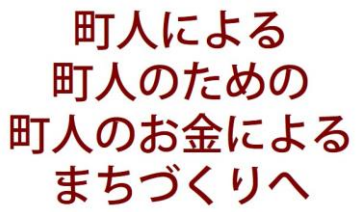
今、同じ大きさになりましたけれども、申し上げたいのは、絶対に同じ大きさにならないということですね。これが途中でとまったところが、僕はコンパクトシティの姿だと思います。ですから、コンパクトシティを成立させるのは、プレイスメイキングという都市に状況をつくるという行動が、実はコンパクトにまちを誘導していくんだということを、おそらく松井さんはおっしゃったんだろうなと思っています。

西村
浩



勘所は 3 つです。コンパクトにすることと、最初に来た 10 人と徹底的に地域を盛り上げるということと、それが外に波及するということをどれだけつくるかということが大事かなと思っています。

清水
義次



最後に清水さんがおっしゃいました。町人による、町人のための、町人のお金によるまちづくり。すなわち、今までは行政がやるものだというところを、やっぱり地域に住んでいる住民自体が、自分のお金を使って、自分たちのために、自分たちのまちをつくっていくべきじゃないか、結論から言うと、補助金に頼るなということを清水さんはおっしゃっていました。

以上で終わります。ありがとうございました。（拍手）

松村　少しだけヤン・ゲール先生のために質問です。佐賀の「わいわい！コンテナ」。最初に出ていた例は北九州ですから、だいたい人口 100 万ですね。次に出たのが紫波町で、あそこは2万から3万ぐらいのまち。ふるさとの佐賀、そこはどれぐらいのまちですか。

西村　これは県庁所在地ですけれども、合併する前が 15 万人。合併して、今、23 万人ぐらいですかね。

松村　その場合にたまねぎ戦法が使えるということですね。

西村　そうですね。

松村　お分かりいただけましたでしょうか。いろいろお聞きしたいことも多々ございますけれども、一通り行きたいと思います。

次に、伊藤香織さんのほうからお願いします。

伊藤　素晴らしいまとめをしてくださった西村さんの後でとてもやりにくいんですが。

私は２回目で、「状況やアクティビティをデザインする」ということでやりまして、この３人のメンバーでやりました。

三浦さんは、マーケティングリサーチャーです。もともと、パルコ系の『アクロス』の編集長をされていたり、そういうことでずっと社会を見つめてこられた方です。

黒﨑さんは IDÉE の創始者の方です。いろいろなプロジェクトの仕掛け人をされていまして、当日は国連大学で座談会をやったんですが、その日も国連大学の前でファーマーズマーケットが行われていたり、表参道の角の 246Common というプロジェクトを仕掛けたり、そういったことをやられています。

私は先ほどご紹介いただいたとおり、都市計画の研究をしていますが、一方で、東京ピクニッククラブというのを主催して、都市の公共空間をどう使いこなしていくか、使いこなされていく都市の公共空間というものを目指しているピクニシェンヌです。

こういうメンバーなので、かなり自由に進みまして、第１回のように、最初の問題設定があって目的にたどりつくような感じにはならなかったので、ちょっとゆるゆると紹介させていただきます。

お二人とも都市生活文化についてを主要なテーマとして持たれているので、まずは心地よいと感じる場所とか都市生活像というのはどういうものがありますか、どう思われますかというふうにお聞きしました。

三浦さんは、西荻に働く場所があって、毎日、西荻から中野まで各駅をぶらぶらして、高円寺で銭湯に入って中野で一杯やると。そういう自分の居場所を自分の周りにいっぱい持っているのが幸せだというふうにお

っしゃっていました。

心地よいと感じる場所や都市生活像

昔は，まちに「変な人」がいて仲良くなった（掃除をしているホームレスやこわいおばあさんや傘売りの黒人のおじさん），そういう人がいるのが，ホッとする．「ちょっと一服」の感覚．すごく賢いかすごく外れている人の中に結構おもしろい人がいて，そういう人たちとの会話の中からインスピレーションが生まれる．Farmer's Marketや246Commonもおもしろい若者たちとやっている．農業や古家がファッショナブルであるという感じに仕掛けている．（黒崎）

黒崎さんのほうは、昔は、例えば、いつも道で掃除をしているホームレスの人とか、ちょっと怖いおばあさんとか、駅の前で傘を売っている黒人のおじさんとか、そういうまちに変な人がいて、でも、そういう人と自分は仲よくなってきたと。そういう人がいるのがほっとするし、ちょっと一服という感覚である。そういう面白い人たちを集めて、いろいろなプロジェクトをやっていますよというようなお話をされました。

都市の本質は交流

都市の本質は交流．全然異なる人たちが出会って知恵や情報を交換したり，分業したりしながらイノベーションが生まれる場が都市．そのフィジカルな現れが公共空間．（伊藤）

インスピレーションはほとんど会話から生まれる．（黒崎）

誰か知り合いと出会って，今度こういうことをしようと話したりする機会は，吉祥寺より圧倒的に西荻が多い．「適度なにぎわい」が大切．人が多ければいいというものではなく，ふと出会って会話してそこからインスピレーションが得られるプレイスがあることが大事．

まち全体が大きなシェアハウスのよう．焼き鳥屋がリビングルームのようになっていて，イラストレーターがデザインの仕事を頼まれたんだけど誰かやらないかと言うと，隣にデザイナーが座っていたというように，まち全体が職安のように機能できている．（三浦）

そういったお二人のお話を伺っていると、人と出会うこと。都市の本質は、私は交流だと思っているんですが、そういうことを都市に求めているのではないかと思いました。

言い忘れましたが、3 人とも東京出身です。東京生まれの東京育ちなので、かなり第 1 回目の議論とは異なると思います。やはり東京を、もっと人のための豊かで楽しいまちにしていきたいという思いで、それぞれ活動しているんだと思います。

そういった都市の本質というのは交流じゃないですかねというお話を振ったところ、黒崎さんは、インスピレーションというのはほとんど会話から生まれるんだ、だから、会話をしないと何事も動いていかないよというお話をされました。

それから、三浦さんのお話で面白かったのは、適度な賑わいが大事であると。三浦さんは、吉祥寺と西荻に拠点を持たれていますが、誰か知り合いと出会って、「今度、こういうことをしよう」とか話したりする機会は、吉祥寺より圧倒的に西荻が多いと。吉祥寺は知り合いと出会うにはちょっと人が多すぎるというんですね。西荻だと、ふと出会って、会話して、そこからインスピレーションが得られる、そういうプレイスなんだとおっしゃっていました。だから、さっき右のほうに焼き鳥屋の写真がありましたけれども、こういう場所が西荻にはたくさんあって、いろいろな若い人も、お年寄りもいるし、外国人もいる。そういう場所が、まち全体がシェアハウスのようになっていて、焼き鳥屋がリビングルームのようだと。もうその場で、ちょっと偶然、隣に座った人とプロジェクトが始まったり、そういうまち全体が職安のように機能しているんだというふうなことを言っていました。

働き方

西荻では，お店をやっている人がアルバイトではなく，自分でやっていて，かつその近くに住んでいる．それによって，プレイスがつくられる．まちへの関与の仕方，まちの愛し方，自分の居場所を見つけるチャンスを得るためには，働き方を変えないとだめ．（三浦）

クリエイティブな仕事というのは，職種の問題ではなく，どんな仕事でもクリエイティブなことはできる．渋谷区青葉台の古いマンションをリノベーションして，クリエイティブな人たちのシェアオフィス「みどり荘」をつくった．（黒崎）

「シビックプライド（＝都市に対する市民の誇り）」は，単なる郷土愛ではなく，この場所をより良い場所にするために自分自身が関わっているという，ある種の当事者意識に基づく自負心．仕事や生活を通して，能動的に・創造的にまちに関わることで，シビックプライドが生まれる．（伊藤）

そこから働き方の話になりまして、西荻というのは、お店をやっている人はアルバイト、雇われではなくて、自分でやっていて、かつ、その近くに住んでいると。それによってプレイスというものがつくられているのではないか。そういう人のほうが、まちへの関与の仕方、愛し方、自分の居場所の見つけ方というのが全然違うということで、そういうチャンスを得るためには、働き方をそもそも変えなきゃ駄目だと。遠くから通って、雇われて、言われるままに働くのではなくて、できるだけ自分の創意工夫で働けるような環境が必要だと。

黒﨑さんは、クリエイティブな仕事というのは、今、クリエイティブ産業とかそういう言葉がありますけれども、そういう職種の問題ではなくて、どんな仕事でもクリエイティブなことはできるということで、それは自分で創意工夫できるということと同じだと思うんですけれども。この写真は黒﨑さんが仕掛けられているみどり荘という、渋谷にある古いマンションをリノベーションしたシェアオフィスですが、そういったことを仕掛けていっているし、いろいろな全然違う職種でのクリエイティブな人を集めてやっていますよという話でした。

私はシビックプライドという話を少しさせていただきました。シビックプライドというのは都市に対する市民の誇りのことですが、それは単なる郷土愛ではなくて、ある種の当事者意識に基づく自負心なので、仕事とか、生活とか、そういったものを通して、能動的に、あるいは創造的にまちにかかわることでこそ、シビックプライドが生まれるんじゃないかという話をさせていただきました。

価値観の変化

消費して物を所有することより，自分が能動的に関与して物事が変わることに意味を見出している人が増えてきているのでは．（伊藤）

価値観の変わっていない人も多いが，いつの時代でも新しい価値観に敏感な人がいる．30年前だったら渋谷公園通りのパルコで買い物をしたり，コムデギャルソンを着ていた人．そういう敏感な人が，今は，新しいものより古いものに魅力を感じたり，受け身で消費するより能動的に何かをつくり出すことに関心が向かっている．今，自分が興味を持っているのは，「拾う技術」．（三浦）

価値観は変わり続けている．物が売れないと言うが，Farmer's marketで農家の料理の前売りチケットがすぐに売り切れたりする．「本物」をきちんと見る人はいる．安い商業主義的なマンションより，古いけれど壁が厚くてきちんとしたつくりの建物の空間に本物があると思えるかどうか．そちらの方により重きを置いていけば，状況はどんどん変わっていく．ただ，それはある程度仕組んでいかなくてはいけない．（黒﨑）

国連大学前のファーマーズマーケットであるとか、先ほどお見せした黒﨑さんのいろいろなプロジェクトとか、西荻でのこういった生活なんかを見ていくと、価値観が変わってきているのではないでしょうか、今まで消費してものを所有するということに価値観が置かれていたとすると、もう少し自分が能動的に関与して物事が変わるとか、そういったことに意味を見出す人が増えてきているんじゃないでしょうかというふうに問いかけたところ、価値観が変わってきている人もいるけど、変わっていない人もいるよというのが三浦さんのお答えで、ただ、いつの時代でも新しい価値観に敏感な人というのがいる。それは30年前だったら渋谷の公園通りのパルコで買い物をしたり、コム・デ・ギャルソンを着ていた人である。だけど、そういう人が、今は地方都市に行ったりとか、古い家をリノベーションして住んだりしていて、例えば、新しいものより古いものに魅力を感じたりとか、受け身で消費するよりは能動的に何かをつくることに関心が向かっているんじゃないかというふうにおっしゃっていました。

ちなみに、三浦さんが次に書きたい本は『拾う技術』。もうシェアも過ぎて、今、拾っているそうです。

それから、黒﨑さんは、価値観というのは常に変わり続けているし、ものが売れないといっても、今はファーマーズマーケットでどんどん売れたりしているよと。本物をきちんと見る人がいて、安い商業主義的なマンションより、古いけれども壁が厚くてきちんとしたつくりの空間に本物があると思えるかどうかというところがポイントだろうと。そう思ってもらうためには、やっぱり少し仕掛けていかないといけないということで、黒﨑さんのされているプロジェクトというのは、おそらくそういった、黒﨑さんが言うところの「本物」というものを、いかにそれが豊かな生活で、もうちょっと軽い言葉で言うとおしゃれであるかどうかとか、そういうふうに見せていくような仕掛けをされているんだと思います。

情報や箱ではなく，実存に価値がある

情報をどう流すかが重視されてきたが，実存としてのコンテンツがきちんとないとしかたない．状況をデザインするのは，美意識を持ってキュレーションすること．

金融が情報になって，お金はメディアに戻ってきている．本当の価値，実際に行われる，実存する価値がすごく大事になってきている．（黒﨑）

大きな主体が大きな箱をつくって，ありきたりのものを詰め込んで，そこでだけ消費するような「箱のシステム」を喜ぶようなライフスタイルは減って欲しい．外食でも本物を味わっていけば，箱のシステムは減っていくはず．何にお金を出しているのかということに敏感になるべき．

デザインする主体は誰かというときに，限りなく小さな主体がたくさんいるのが楽しいと思う．（三浦）

その背景には、実存に価値を見出しつつある社会というのがありまして、結局、情報をどう流すかというのが重視されていたし、お金も、金融もどんどん情報化されてきていて、「実存って何なんだ」と思いつつある人々が感じつつあるのではないか。状況をデザインするというのは、情報を流すことではなくて、きち

んと美意識を持って、その実存をキュレーションすることであるとおっしゃっていました。

同じように、三浦さんのほうは「箱」という言い方をされていましたけれども、大きな主体が大きな箱をつくって、ありきたりなものを詰め込んで、そこだけで消費するような、箱のシステムを喜ぶようなライフスタイルは減ってほしい。外食でも本物を味わっていけば、箱のシステムは減っていくはずで、何にお金を出しているかということに敏感になるべき。高いものは箱の代金であったりとか、あるいは異様に安いものも逆に気にしたほうがいいだろうというようなことをおっしゃっていました。

私がこれはすごくいいなと思ったのは、デザインする主体は誰かというときに、限りなく小さな主体がたくさんいるのが楽しいと思うと。

最後ですが、結局、そういう都市生活文化というのを求めていくと、プレイスが現れてくる。三浦さんは、僕の周りには世の中をよい方向に動かしている人がいっぱいいると。みんなおいしいものが好きで、行動的で、面白いまちや村、面白い人に会いに行っていて、その会った場所で一緒に何かやっているという共通点がある。

黒崎さんは、かなり移動されているので、移動が多いと、居住と滞在の概念が曖昧になる。よい空間の中に身を置くとホテルでも自分の部屋のように思えたり、ピクニックと同じで、そこが自分のリビングルームになったり、ダイニングルームになったりする。居住と滞在、あるいは、所有と共有というものもだいぶ変わってくると思う。だから、それが居住なのか滞在なのかという問題ではなく、固定的な空間ではなく、そこに立ち現れてくるプレイスというものが新しい都市生活というものをつくっていくのではないかというようなところで締めました。（拍手）

松村　ありがとうございます。これはもうかなり難しいディスカッションをやっていらっしゃった。

伊藤　ディスカッションにはあまりならなかったですね。

松村　飲み屋の会話にかなり近い、高い水準に行っていましたね（笑）。

伊藤　そう思っていただいて結構です。

松村　ありがとうございます。

それでは、最後、渡先生に３回目のまとめをお願いします。

第3回座談会

「賑わいや心地よい空間をデザインする」

渡　和由

渡　３回目の内容的は、私も含めて３人のスライドをそのまま借用して話をします。

まず、最初に鈴木さんのほうからプレイスメイキングと都市デザインということで、実はプレイスメイキングと都市デザインというのは、先ほど言った小さなエリアを扱うプレイスメイキングと、都市というのはもっと大きなフレームみたいなものであって、それを両方、同時に考えるべきであるということがありまして、この後もいろいろな話をされました。

1. Placemaking に関連する都市デザインの系譜

2. Placemaking と New Urbanism
   ・鳥瞰レベルからアイレベル（ヒューマンスケール）まで、一貫したデザイン

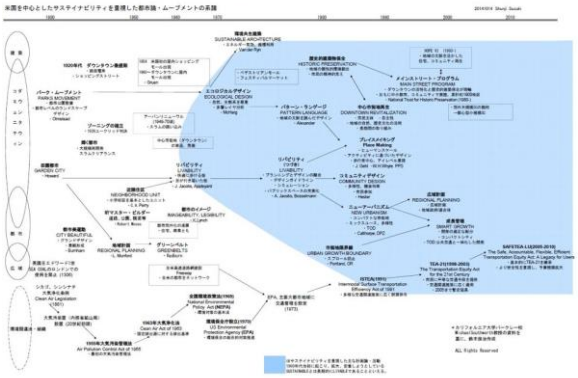
   ・人間の活動を「主役」にしたデザイン

3. Sense of Place
   ・認識し、共有する

4. コミュニティをベースとした包括的な取り組み
   Main Street Program
   エリア・マネジメント

2 番目に挙げているのが、ニューアーバニズムとプレイスメイキングはかなり密接に関係があるということ、そして、先ほど来、出ている、人の活動、アクティビティを主役にしたデザインであるということと、それから、もう一つは、センス・オブ・プレイス、これを再認識して共有する必要がある。そして、ある種のコミュニティというものをベースにした包括的な取り組みであるので、それなしにはプレイスメイキングというのは考えられないだろうということです。

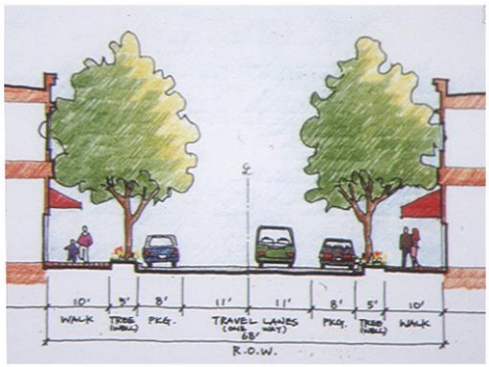
米国を中心としたサステイナビリティを重視した都市論・ムーブメントの系譜
カリフォルニア大学バークレー校MichaelSouthworth教授の資料を基に、鈴木俊治作成



実は、これは読めないことを前提でお示ししております。これはお手元に配ったハンドアウトの資料ですけれども、鈴木さんがオリジナルでまとめていただいて、もともとはバークレーの先生がつくられたものを基に鈴木さんのほうでつくったものです。鈴木さんはご経歴の資料にありますように、バークレースクールの出身であります。それともう一つは、ニューアーバニズムの創始者の一人であるピーター・カルソープの事務所で働いていた経験がありますので、こういう表をつくっていただきました。この中にはいろいろな今までの都市デザインの動向が書かれていまして、プレイスメイキングはこの真ん中あたりに位置付けられているという表です。

New Urbanism の計画例 San Elijo, CA (Calthorpe Associates)

それから、これは、先ほど紹介しましたピーター・カルソープの事務所で鈴木さんがかかわっておられた、いわゆる都市デザインのサイトプランと呼んでいいと思います。土地利用図と建物の配置とかが全部混じっていて、例えば、公園のこういうところもちゃんと空間が絵になっています。これはなかなか普通、日本ではあまり書かないですよね。普通、色分けをして終わってしまうんですけれども、実はここが重要で、例えば、駐車場の配置ですとか、建物がいかに道路に面するかとか、公園に面するか、そういったところをこの段階から考えているという説明です。



歩道や接続するPublic Spaceでどのようなアクティビティを起こすか？

そして、このぐらいのレベルの通りと建物との関係、その中間領域も示して考えている。そこでどのような

パブリックスペースで、どのようなアクティビティを起こすかということを、このレベルからもう既に考えているということで、それを鈴木さんは日本でも実践しているということで、この神楽坂のプロジェクトなどの説明をいただきました。

Sense of Place を確認し、地域で共有する（神楽坂通り）

その居場所感をスケッチでまずリサーチしながら、そのポイントを表して、さらにそれを計画につなげていくという手法を使われているようです。

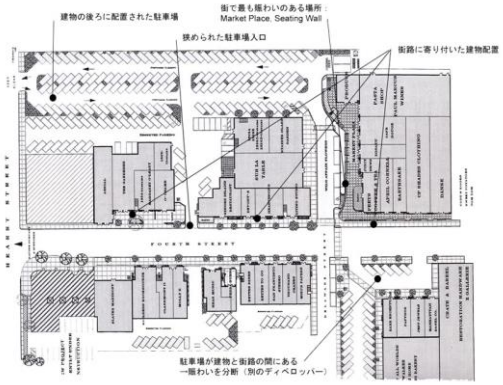
これはもう一つ、重要なポイントで、先ほどもちょっと話がありましたけれども、実はプレイスメイキングというのはエンターテイメント系で、おしゃれで、都会的というイメージもあるんですけれども、だけではない。実は重要なのは、こういう生活系の、自然に生まれたような、あるいは生活の生業から生まれたようなプレイスメイキングが重要であると。これは、東南アジアの事例のスケッチです。

誰もが、無目的に都市を楽しめる空間～きめ細かい都市デザイン

そのようなことをアメリカで実現した事例を説明いただきました。もともと倉庫街だったところを再生した、バークレーにある 4th Street という通りです。

自由に使える「まち」空間

このように誰でも座れるんですけれども、周りからいろいろ食べ物を買って食べることができるような、自由に使えるまちの空間というのがちゃんとつくられている。



駐車場は表通りから見えないように配置

それがこのサイトプラン上も位置付けられていて、こういう場所づくりとともに、ちゃんと配置計画、そしてそれがどういうところに位置付けられているかというのをはっきり、同時に考えられながら進められているということです。

Main Street Program ： The Four Point Approach

組織 Organization
プログラム運営を適切に行い、関係機関と調整し、人材を有効活用し、合意形成を行うための最適組織づくりと維持

促進事業 Promotion
イベント、資金集め、投資誘発、広報、知名度PR

デザイン Design
街路、建築、オープンスペース、ストリートファニチャ、サイン
デザイン管理システム 等

経済立て直し Economic Restructuring
既存の経済基盤強化、営業支援、新規ビジネス誘致

そのような取り組みというのは、メインストリートプログラムというような、ある種のメソッドがありまして、そこでも位置付けられているということを説明いただきました。これがその資料です。これはご覧いただくだけで、説明は特にしません。

成功のための8つの鍵

① 包括的であること
② 段階的に進められること
③ コミュニティが主導すること
④ 行政と民間の協働であること
⑤ 既存の地域資源を基にすること
⑥ 最高の品質（Quality）であること
⑦ 前向きの変化を起こすこと
⑧ 実現を前提とすること

そして成功のための８つの鍵ということで、この項目をご提示いただきました。先ほど来申し上げているようなことを箇条書きにまとめていただいていて、既存の地域主義は残すとか、行政と民間の協働や、クオリティを重視する、前向きの変化を起こす、そして、その実現を前提とするということで、このあたりにそのプレイスメイキングの手法が有効ではないかと考えます。

三友さんのプレゼンテーションですが、三友さんの場合は、今度はニューヨークスクールの成果を研究でいろいろ調査して、それを論文にまとめた成果を示していただきました。

これはブライアントパークです。ブライアントパークに３年ぐらい、年に何回も、各季節、１週間ずつぐらい、この公園に住みつくように、朝７時ぐらいから、夜 12 時近くまで滞在しながら、観察調査などを行い、さらに PPS にもヒアリングに二、三度行っています。私もその中の何回か同行しています。

プレイスメイキングの原則

プロジェクトフォーパブリックスペース（Project for Public Spaces, PPS）が提唱

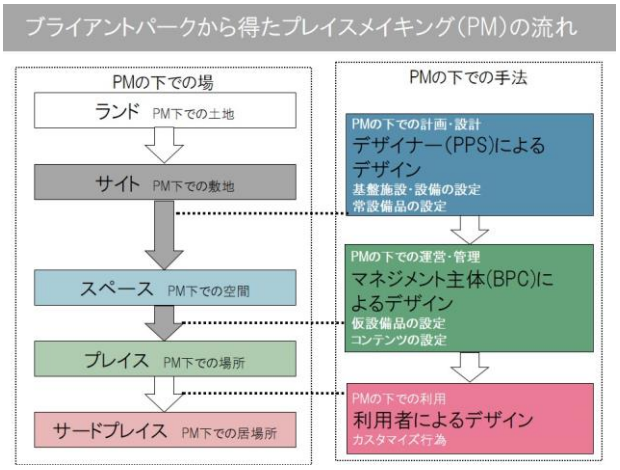
PMの基本的な考え方	1	PMでは、地域の人々も専門家である。
	2	PMにおけるデザインとは、居場所を創出することである。
	3	居場所となり得るような公的空間を創出・再生することは、一人では不可能である。
	4	（公的空間に関わる公務員を含んだ）専門家達は「それはできない」と発言するが、不可能という意味ではなく、経験（前例）がないだけである。
PMの計画手法と調査手法	5	PMでは、利用者や（利用されている）空間を観察することによって多くの発見や視点を得られる。
	6	PMで重要なことは、皆で共有できる理想図をつくりあげることである
PMでの考えを行動に移す	7	PMにおける形態とは、イベントや活動を支えることである。
	8	PMでは、（利用される）空間、活動、利用者のつながりを創出することが重要である。
PMの実践	9	PMでは、ペチュニアの花を植えるように一人でもできる小さいことからはじめることが重要である。
	10	PMの実践において、予算は大きな問題ではない。
	11	PMにおいて公的空間の居場所づくりに完成はない（ずっと続くものである）。

How to Turn a Place Around A Handbook for Creating Successful Public Spaces, PPS
邦訳 オープンスペースを魅力的にする一親しまれる公共空間のためのハンドブック,学芸出版社,
加藤源監訳, 鈴木俊治・服部圭郎・加藤潤訳

これは先ほどの鈴木さんが翻訳された本に既に著されておりますが、三友さんが独自にちょっとだけ翻訳をし直したものです。特に重要なのは、ここのピンク色に書かれたこの部分ですね。居場所となり得るようなところというのは、１人では不可能。先ほど、ヤン・ゲールさんがおっしゃっていたように、いろいろな人がそこでポジティブな活動をしていると、これが重要である。

それから、これはブライアントパークの概要です。もともと、1990 年代の初めぐらいまでは、麻薬取引の場所でした。私もそれを体験しています。1991 年に行ったとき、本当にしていまして、びっくりしたんですけれども、それが全く別物になっていました。

これがその俯瞰図です。上から見た図でして、実はブライアントパークはそんなに大きくないです。日比谷公園との比較でこのぐらいしかないです。それで、さらにここの図書館がありますので、実際の 5000 近い椅子やテーブルが置いてあるところはこれしかないんです。そこの中にここで書いてあるような、いろいろなレストランや椅子がひしめき合っている。



それを自由に、自在に使えるようになっていまして、ここで重要なポイントは、その公園にかかわる全ての主体、例えば、PPS で企画、計画をしたデザイナー、そして、これはブライアントパークコーポレーションという民間会社ですが、たぶん、BID の会社ですけれども、それが実際に管理しています。そして、実際、利用者が、それを、いろいろ椅子を動かしたりして、自分で自在に使っています。管理会社から利用者まで全てが運営の主体になっている。

交流する場とか、シェアする場、それから自分らしく一人でもいられる場所ということで、そういうふうにこの公園は使われているということを研究成果として示されました。

この図は、実は、ヤン・ゲールさんのチャートとちょっと違うんですけれども、三友さんの独自のブライアントパークからの結果です。

一人一人とまちが活きる プレイスメイキング

筑波大学 芸術系 渡 和由

次に、私のほうで、先ほど既にお話しした内容とちょっとかぶるところがあるんですが、アメリカの事例を一つだけ示します。路上レストランです。車道を使っています。これはシリコンバレーのど真ん中にある

マウンテンビューというところでGoogleの本社とか、もともとAppleの本社もその近くにあったんですけれども、そういうクリエイティブなところほど、こういう場をどうも求めるということらしいです。

■米国の事例　カストロ・ストリート（シリコンバレー）
車道レストランの座席
（駅前メインストリートを4車線から3車線に改修）

この写真は歩道を使っていないんですけれども、実は歩道と車道、両方とも使っています。4 車線のところを 3 車線に縮めています。ある種、減築をしている。これはカストロストリートというところです。駅前の通りです。

①「みんなのイス」で市を支援（地震・竜巻の被災地）
600脚のイスで座席と食の提供／車は通行

これはまた全然違う雰囲気の日本の事例ですけれども、先ほどの皆の椅子の 200 脚と公共施設から借りたパイプ椅子も合わせて、600 脚を使った路上レストランのような市（いち）です。このように並べてみたら、皆さん喜んで使っていただきました。今まで座席がないので、皆さん、どこで食べていたんだろうということを、市役所の方もおっしゃっていました。ここでもやはり食の提供というのが同時にあると、皆さん、使ってくれる。

被災した家の空地

ここは地震と竜巻、両方被災したまちです。そういうところの空き地で椅子を使いました。

②公共空間活用に向けた
「オープンカフェ条例」の社会実証実験
（つくば市）

今、つくば市で条例化、通称、オープンカフェ条例というんですけれども、条例化を目指して、社会実験をしているところです。歩道上で、こうした移動販売車を使ったり、椅子やパラソルを使って、実験をしています。

③公園のピクニックを支援する店
ドーナッツ店（吉祥寺）

これはちょっと面白い事例で、伊藤さんのピクニックにもつながると思うんですが、公園でピクニックを支援する店なんですね。

ドーナッツ屋さんで何か買えば、ピクニックシートを貸してくれる

利用者になってみた
ピクニックシートで公園の芝生に座れる！

ドーナツを売る店の前に公園があります。ここでドーナツと豆乳を買うと、ピクニックシートをただで貸してくれるんです。そして、私が利用者になってみました。誰もいないですけれども（笑）。1 人でもかなりピクニック気分が出せたなという気がします。ちなみに、三浦さんもここで何回かやったことがあると言っていました。

このような簡単なことで、けっこう場ができます。

④動く商店街による週に一度の「出かけ場」
買い物困難者への行商支援（北茨城市商工会）

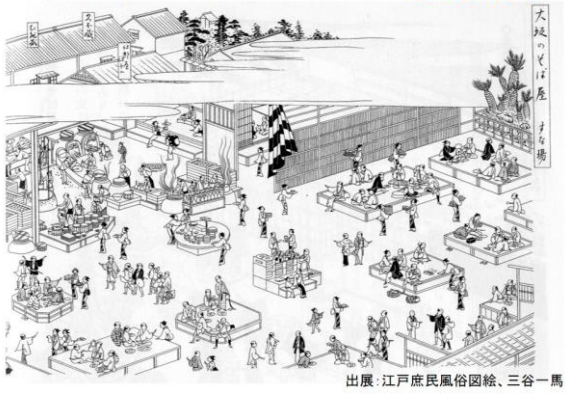
今度は高齢者がたくさん住む丘の上の、やはり地震の被災地の住宅地なんですけれども、これは北茨城というところで、商工会がやっているサービスで、行商サービスです。ただ、これは家に届けるのではなくて、ポイントは住宅の空き地の広場に 2 つの車を使って届ける。そうしますと、半径 400 メートルぐらいから人が歩いてくるんです。つまり、人を歩かせることが重要で、仮設の臨時広場をつくって、人に歩いて来てもらって、週 1 回、必ず同じ時間に来る。そうしますと、ここで皆が 30 分前から既に待って、集まってわいわいしています。

このような取り組みをいろいろやっています。

⑤病院に接する歩道の座れる花壇

今度は歩道に座れる花壇ということで、病院の前です。先ほども病院の事例がありましたが、今度は病院に挟まれたつくば市の歩道にあるこの街路樹の足元に、これも再生的に座れる座席をつくりました。いろいろな人が集まってきます。保育園の園児や、車いす、それから、病院のストレッチャーで寝ている人も出てきたりします。ここは座る場所が動かないんですけれども、人を動かすという効果があることが分かりました。

⑥江戸時代のプレイスメイキング　青空そば屋



出展：江戸庶民風俗図絵、三谷一馬

ちなみに、これは日本の昔です。江戸時代の絵図ですけれども、実は日本人、プレイスメイキングが得意だったというある種の証拠になると思います。これはブライアントパークみたいです。大阪のそば屋です。

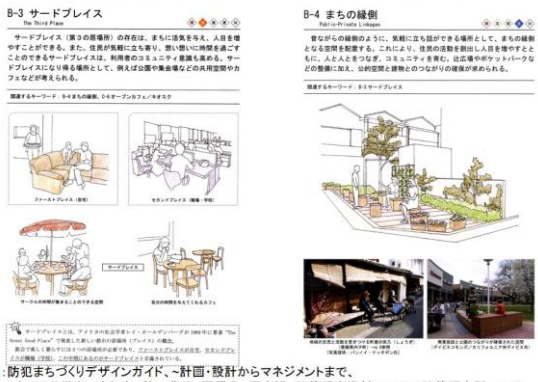
江戸時代の茶屋

開放的な店先・台所、屋内と屋外の多様な座り場

出展：江戸庶民風俗図絵、三谷一馬

これは江戸時代の、たぶん、東京だと思いますが、茶屋です。これもよく見ると、縁側的ないろいろな座り場所、それから、床机というベンチみたいな縁台、台所も通りから見えて、現在のスターバックスみたいな、ある種の空間をつくっています。これも完全に全面開放です。これは官民境界です。まだ絵図たくさんあるんですが、そのような絵図を見ると、日本人は居場所の設えが得意だったんじゃないかということです。

⑦防犯環境設計における自然監視の場



出展：防犯まちづくりデザインガイド、～計画・設計からマネジメントまで、
樋野公宏、石井信光、渡和由、秋田典子、野原卓、雨宮護、建築研究資料No.134、建築研究所、2011

そして、さらに、防犯環境設計という、これは別の研究チームとやった作業なんですけれども、このように実はプレイスメイキングをすることによって、防犯環境もつくれる。これは自然監視、ナチュラルサーベイランスです。これがいろいろなまちなかに生まれると居場所づくりが防犯にも役立ちます。

⑧既存環境を活かす／簡単につくる／組み合わせる

7つの場

1. 座り場　（すわりば）
2. 眺め場　（ながめば）
3. 食 場　（しょくば）
4. 陰り場　（かげりば）
5. 灯り場　（あかりば）
6. 話し場　（はなしば）
7. 巡り場　（めぐりば）

※ 渡造語　重要な順

ヤン・ゲール先生の 12 のパターンがありますが、私としては簡単にできそうな、分かりやすい言葉でまとめると、この 7 つぐらいをやっておけば、とりあえずプレイスがつくれると思います。重要なことの順に並んでいます。1 番目が座れる場、次に眺め場とか食場。この 3 つぐらいがあれば、先ほどのブライアントパーク的な感じが出せるのではないか。そんな気がします。

プレイスメイキングのポイント

- 人の場面（アイレベル・パースペクティブ）を意識
- 場の運営に継続的な手間（サービス）をかける

→ 魅力的な座席・飲食・眺めを提供・運営
→ 経済効果

↓

- 社会的意義：

都市と自然環境の「人のビオトープ」づくり

グッド・ハビタット （ヤン・ゲール先生談）

これは最後ですが、人のビオトープと私は言ったのですが、これ、少し分かりづらいんですね。ヤン・ゲール先生に聞いてみたら、たぶん「human good habitat」とおっしゃっていて、「habitat」というのは、たぶん、日本人に分かりづらいので、それを例えばビオトープに変えると、そうすると、人のビオトープというのがたぶんヤン・ゲール先生の考えていることにかなり近い概念なのかなと。これはまだ私自身、概念規定ができていないので、あまり説明ができないのですが、そんな話でまとめました。

ということで、3 人の話を別々にしましたが、基本的にはそういう全体の枠組みの中でプレイスメイキングということを考えるべきであるというのが、今回の一番重要なポイントだと思います。

以上です。（拍手）

松村　ありがとうございました。

さて、お三人に報告していただいて、なかなか噛み合わないなという。司会席で一生懸命、僕がメモを取っているから、皆さん、質問を考えているだろうと思っているかもしれませんが、全く考えつきません。ただ、今日のシンポジウムの趣旨をもう一回確認しつつ、問いかけていきたいんですけれども。

一つは、皆さん、お気付きだと思いますけれども、封筒に国土交通省と書いてありますね。主催者が国だという。大変驚きました。国土交通省さんがやっている。なぜなのかというのは、私なりの勝手な理解ですけれども、従来、いわゆる都市計画的な……。従来というか、20 世紀というのか、そういうときにお役所なり、国なり、自治体なり、あるいは国が出すお金なり、そういったものが果たしてきた役割、それから目指すべきところ、この辺は、たぶんある一定の像があったんでしょうね。私は専門外なので、おそらくそうだろうと。例えば今、いったい何のためにお金を出すとすると出すだろうか。あるいは、どういうふうに国なり自治体はこのことにかかわっていけばいいんだろうか。そういうことが非常に悩ましい段階に来ているということが一つあると思います。ヤン・ゲール先生がおっしゃっているような、そういうまち、要するに生き生きとして、サステナブルで、健康なまち。それは誰も反対しない。「そんなまちになったらいいな」と言うわけですけれども、それに対して公共というか、国や自治体は何がどんな形で貢献できるだろうかということが、たぶん一つはお悩みとしてあるんだと思います。

もう一つは、一方で、今日は民間の方もたくさんおいでだとお聞きしましたけれども、集まっていらっしゃる方は、国土交通省がやっているから行こうかという人も何人かいるかもしれませんけれども、民間のほうも、おそらくそういう型、プロセスとか、事を起こしていく型が変わってきて、なおかつ、目指すべきビジョンがもう一つはっきりしないという中で、いったい誰に向けて何を働きかけるとどういうことになっていくのかという定型がない時代に入ってきている。その中で、皆さん、何を考えているんだろうかという、まさに伊藤さんがおっしゃる、交流したいということで、非常に都市的な集まりになっていると思います。

私自身は、先ほど来、門外漢と申し上げていますけれども、もともと外部の公共空間なんかもう眼中にない。建物の骨組みとか、どうやって建物を組み立てるとかいう、そういう専門分野なんですね。だけれども、ここの 10 年ぐらい、どうでしょう。もう日本でも、新しく住宅を建てる……。もちろん、建てていますけれども、それが主題である時代は完全に終わってしまったという認識を、多くの人が共有できると思います。それは私の場合、「箱の産業」というふうに呼んでいるんですが、かつて箱の産業だったと。じゃあ、これから何なんだというので、これから「場の産業」だと言い続けているんですね。場の産業、プレイスメイキング。場の産業というのを英語に訳そうとしたら、プレイスメイキングインダストリーになっちゃうというので、何か、急にこの世界と結び付いてきて、こんなところにいるのですが。

先ほどお話に出てきた清水さんなんかと長くお付き合いしています。これはゲール先生もご理解されているかもしれませんが、念のためにお伝えしたいんですけれども、日本のまちというのは、先ほど地方都市は、車が占有しているところが 5 割ぐらい行っているというお話がありましたけれども、一方で、建物が建っているところは、基本的に小さな土地で、小さな建物で、小さな地主が持っているというのはもう圧倒的なわけですね。この状況というのは国際的に見ても、非常に珍しい。つまり、小さな地主が 1 つしかビルを持っていない。まさに神楽坂に建っている小さいビル、あれは 1 個、1 個、違う人が持っていて、まちを動かそうと思ったら、一気になんかできないわけですね。小さな地主が何かディシジョンしないとまちは動かない。その中でば一っと再開発するとかいう方法では、もうないなと。東京の六本木とか、それこそ今だと虎ノ門とか、ああいうところはできますけれども、地方都市なんか、潰したところで、建てても、空き地だと言っているわけですから、芝生を植えるぐらいしかもう手がない、そんなところで建物を潰せるはずもないと。

そうすると必然的に、小さな地主が意思決定する。しかもそれは今、建っている建物を何か使いながらということにならざるを得ない部分が相当あるというようなことがあって、何となく、私ここにかかわっています。

少し長くなりました。司会が向いていない。しゃべりすぎる（笑）。すみません。

一つ、共通してお聞きしたいのは、これは私の理解ですけれども、20 世紀型というのは、非常に大ざっぱな言い方で恐縮ですけれども、よく「ビジョン」とか言うんですよね。ビジョンというのは、先に何か投影して、そこに目標像というのがはっきりとあって、「ビジョンを示せ」と。「俺たちは 20 年後、どうなるんだ」というのをいまだにやっていますけれども、そんなものが功を奏するような時代状況なのかということがあるんですね。

むしろ、先ほど来のお話を聞いていると、まちが変わっていくときの変化をどう導いていくかとか、それがどうやったら持続的に生活者の人たちによって運営されていくだろうとか、これからのプロセスのほうがおそらく確信が持てることで、「ビジョンを示せ」と言われても、そんな、人口、どうなるか分からないし、高齢化の状況なんか、想像もつかないし。僕、あんまり言いたくないですけれども、団塊の世代、ポスト団塊の世代というのか、団塊の世代の下でずっと指導を受けてきた立場で、団塊の世代が 80 ぐらいになったらどうなるのか想像しただけでビジョンなんか描きたくないという感じがあるんですね。

そうすると、ビジョンがない中で、今日のようなお話、共感できることがいろいろあります。例えば、公的な主体、清水さん流の言い方だと補助金なんかいらないということですけれども、土地は公共が大きい土地を持っていますから、公民連携ということになるわけです。そうすると、いったい、首長あるいは住民の代表の議員さん、彼らに、「こういうことをしていくよ」ということをどうやったら説得あるいは共感できるかということが非常に重要で、ゲール先生のお話でも、モスクワの市長の話、ばーんと顔写真が出てきます。こいつが決めたら車なんかあっという間になくなるぜというお話でしたけれども、日本でも当然ながら首長、あるいは議会、こういうところがこの方向性について共感できるかどうかということは、非常に大きなことになると思うんですね。渡先生がさっき、ゲール先生のお話に対して最後に質問したのは、経済効果はどうなんですかということで、ゲール先生から経済は大事というお話がありました。

一つは、いったいそれぞれお考えがどういう方向にまちは向かっていくのが感じとしてはいい感じなのか。目標というより、「こうなってほしいな」ということ、それはいったい。例えばさっき、渡先生のお話のなかで、メインストリートプログラム、成功のための 8 つの鍵というお話がありましたが、何をもって成功と言うのかと。つまり、これができたら成功ですというのがなければ、人を説得することはできませんから、こういうことを目指していて、それはビジョンじゃないんだけれども、何かこんなことを目指していて、こうなったら、一応、うまくいったということになるのか。人が集まればいいのか、何なのかという。すみません。夕方で、だんだん言葉使いがラフになってきましたけれども（笑）。どうぞ、ご自由に、そんな感じのことを。

西村　何かすごいいっぱい質問された感じがします。

今の質問に答えると、車の話が出ましたけれども、間違いなく、ヤン・ゲール先生が言ったように、特に地方都市は車をコントロールするべきだと僕は思います。ところが、ほとんどどこもできないです。いろいろなところで、僕、車をとめたほうがいいとか、駐車場をコントロールしたほうがいいと言うんですけれども、本当に腹をぼこぼこに殴られますね。だいたい、決断ができないで、そのままうやむやにされてしまいます。

松村　住民の方からクレームが来る。

西村　住民の方もそうだし、そうなると今度、政治的にもそうなる。決断ができない状況で日本のまちは前に進めないんですね。それを突破できたところがた

ぶん成功すると僕は思っています。

そのためには、だいたい、車をとめるという状況は、ほかの都市もそうですけれども、今までの 20 世紀型の手法と、全く 180 度逆なわけですね。180 度逆のことをいきなり「認めなさい」と言われても、おそらく嫌ですよね。昨日までやったことを「やめなさい」という話ですから、それは認められない気持ちも分かると。じゃあ、それをやっていこうという状況をつくるためにはどうしたらいいかというと、さっき、ビジョンの話があって、10 年後、20 年後、こうなりますみたいなビジョンを掲げていたら、誰もついてこられないと思います。

僕はキーワードは実験だと思います。1 年、1 年、変わったねという実感をどうやって積み重ねるかという状況が僕は大事だと思います。要は 1 年、1 年、駄目になっている状況というのが、今までずっと積み重なってきていて、もう何をやっても駄目だという状況の中に、例えば佐賀だったらああいう「わいわい！コンテナ」みたいなのをぽんと置くと、子供たちが何か来るようになったねということが次のステップに進めると思います。

ですから、1 年経ってきちんと変わったことを整理して評価して、変わった、よかったねということを地域の人と共感する。「わいわい！コンテナ」なんかは社会実験で、本来、1 年だけの限定だったはずなのに、もう 4 年やっているんですよ。これで問題になってくるかというと、行政の人が議会に予算を通すときに、もうそろそろ実験と言えなくなってきているという。どう説明するかに苦労するんですけれども、それを一生懸命説明していくと、それが当たり前の社会になって、固着していくという社会に。下向きのらせんだったものを、上向きのらせんにどう変えていくか。昇るために、1 年間、毎年、毎年、変わった、よかったという実感をちっちゃく、ちっちゃく積み重ねることだと思います。それが僕はこれからの都市計画の手法じゃないかと思っています。

松村　西村さん、選挙に出たほうがいいんじゃないですか（笑）。すごい話が分かりやすいし、何かもう信じられる。

ちょっと具体的な質問をしたいのですが、「わいわい！コンテナ」プロジェクト。あれは、要するに市が 4 年、暫定的にやっているとおっしゃるものの、そもそも土地は誰の土地で、そのコンテナだって、芝生を植えたりも、当然、お金がかかるわけで、そういうような支出は、いったいどういう仕組みになっているんですか。

西村　社会実験ですから、敷地は民間の人が持っていて、それを固定資産税分ぐらいのお金を払って、借地をしています。コンテナは、実は行政がお金を出しているわけではなくて、地元の工務店がお金を出してつくっていて、それを行政にリースで貸しています。だから、行政は、コピー機を借りている感覚で、図書館を持っているんです。あれは中に雑誌が入っているんですけれども、300 種類の雑誌と絵本と漫画だけしか入っていないんですけれども、それをコピー機の感覚で、実は実験をしているんです。

ですから、ゼネコンの人たちは、要は、リースの償却期間がきちんと決まっていて、それを超えると利益につながっていくというビジネスになっているんですね。

西村
浩

芝生は、さっき写真を見せたように、ホームセンターで買ってきた芝生を地域の人を呼んで張るということをやっていますから、実はほとんどお金があんまり、行政のほうはお金を出していない。ただ、維持管理をするのに少し人を入れたりということをやっていますけれども。

最終的には、おそらく、これが本当にまちの中に必

要であれば、僕は買えばいいと思うんです。何で買えばいいというかというと、実は日本の中心市街地は、商業地ですから、ほとんど公共の空間というのが道路以外にないんですよね。だから種地として、そろそろまちの中に公共の場所というものを持って、その種地を原資にしてまちを動かしていく、新陳代謝を高める種地をして使っていくためにも、必要であれば買えばいいと思います。

松村　ありがとうございます。話の流れで、先に渡先生、行ってもよろしいですか。

渡　私のほうも、先ほど、西村さんがおっしゃったことにかなり近いのですが、例えば地方都市に行くと、どうしても車は必需品です。ですから車と自転車を両方使えばいいと思います。

私の住んでいるつくば市のそばに、りんりんロードという自転車道があって、霞ヶ浦のほうも最近、自転車道になったんです。例えば、そういうところに自転車を車に積んで行って持っていって、そこで乗り換えるとか、つまり、そういう新種のパーク・アンド・ライドとかをすればいい。それから、まちなかに車で行って、そこにとめる、先ほどのカストロストリートみたいに椅子にライドするという、パーク・アンド・ライド。椅子とか公園に座る。

つまり、そういうことを少しずつ組み合わせていけば、自転車の楽しさが分かってきたり、あるいは、そこでまた飲食店が増えたり、そういう形で少しずつ変わっていく。それをうまく捉えて、さらにそれを促進するような、例えば行政の仕組みや、あるいは民間の取り組みを少しずつ積み重ねていって、それをうまく、例えばメディア化する。これも重要で、つくばでもつくばスタイルというメディアをつくっているんですね。これに実は茨城県と UR 都市機構が支援しているんですよ。

つくばというのは広すぎて、まちを一目で捉えきれないんです。たぶん、ヘリコプターでも無理です。飛行機でないと。そのようなところでは、まちのいろいろな楽しいところやいいお店を雑誌としてまとめないと、まちが視覚化されないんですね。そういう形で試したら、最初、2 巻ぐらいで終わりそうだと皆、思っていたんですけれども、実は今、18 巻まで出ています。10 年間。まちのコンテンツを常に出せるようなメディアになっています。

例えばそういう形で視覚化して、いろいろな人にまちを見せて情報を共有していき、行政の議会などでも共感を少しずつ積み上げていくと、たぶん、首長が何か言ったときにも動きやすくなるという気がしました。

以上です。メディアも使うということですね。

松村　最近、たまたま見た例だと、UR さんが団地をどうするかと。高齢化はしてくるし、空室は増えてくる。場所のいいところはいいけれども、場所が悪いところは、これから持続的に経営できるかどうか。当然、建て替えもできないというのでどうしようかというので、団地マネジャー制度というのをつくって、団地ごとにある程度決定権を持って。神奈川の横浜でやっているので、アール不動産の馬場さんたち、あの人たちはメディア系ですから、すごく気の利いた……。今日のこれもすごく気が利いていると思いますが、これをもうちょっと一回り小さいぐらいですかね。団地の暮らしについて、いろいろな視点の、ちょっとビジュアルな、今までの UR の団地にない感じのメディアをつくって配っているんですよ。それで、「いやあ、よく UR さん、こんなのつくったな」「いや、なかなかね、うちの中ではこれ、どうかなと言ってたんですけど、評判がよくて」なんて言って。

つまり、メディアがあると、人の反応もおそらく、皆、どういうことを考えているのかとか、どういうものがいいと思うのかとかいうこと自体が、そもそも伝えていないから、おそらく渡先生がおっしゃるように、非常に。こぎれいにデザインされたメディアである必要はあると思いますけれども、大変重要なんでしょうね。

渡　基本的にはリアルなサイトをウエブサイトで見せる。リアルなサイトがちゃんとあるということが重要だと思います。

松村　ということで、東京ピクニッククラブ代表の伊藤先生にお願いします。

伊藤　先ほど第2回の座談会のご報告をさせていただいたんですが、メンバーの都合で、自分の話が全くできなかったので、関係ないように聞こえるかもしれないんですけれども、つなげていきますので、少しだけしてもいいでしょうか。

東京ピクニッククラブというのをやっています。ピクニックの歴史を探っていくと、近代都市と関係があるんですね。ピクニックというのは社交なんですけれども、都市の公園ができてきたとか、19世紀前半から半ばの動きと非常に関係があるんですが、都市の中でどうやって交流をするのかということを考えながらやっています。

東京で「フィールドワーク」と称してたくさんピクニックをやりました。何をやっているかというと、昼間からワインを飲むんですけれども、そういうのをいろいろなところでやります。

やってみると分かることというのがたくさんあります。社交なので、人の集まりやすい場所、公共交通があるとか、そういう場所でやりたいなと思うんですが、さっき日比谷公園が出ていましたが、日比谷公園はすごく広い芝生があるんですけれども、立ち入り禁止なんですね。そういうふうに、結構、できないなと。格好よく、楽しくやりたいのに、意外とできないなと思いました。

じゃあ、もうちょっと攻めてみようということで、できるかできないか、ぎりぎりの場所でやってみたりしています。東京フォーラムの中庭は駄目でしたね。やってみましたけれども。それから、中央分離帯も怒られました。車両通行止めのときにやったんですけれども、でも、怒られました。意外とできる場所とか、できない場所とか、やってみることで分かるなと。

東京の公共空間は不自由であるという結論を導いて、そこから、都市の公共空間を開放せよみたいな圧力団体として動いていこうと思ったんですが、なかなか、それも堅い、難しいということで、一方で、ピクニックをはやらせたほうが早いんじゃないかと思ったわけですね。ピクニックをイベント的にやったりする。それは東京というよりは、結構いろいろな地方都市、地方の大きめの都市で。

あとは、最初に呼んでいただいたのは、イギリスのニューキャッスル・ゲーツヘッドというまちですが、国外でも3回か4回ぐらいやっています。ニューキャッスル・ゲーツヘッドではインバイトされて、ピクニシャン、ピクニシェンヌとして、10日間、ピクニックをやり続ける。いろいろな、まちのまちらしい場所を探しながら、10日間、別の場所でピクニックをやるんですが、そんなこともやっていました。

ニューキャッスル・ゲーツヘッドで面白かったのは、そうするといろいろなものが乗ってこられるんですね。例えば、図書館の近くでやったときは、その図書館の司書さんが読み聞かせをピクニックでやりますとか、アーティストが凧揚げのワークショップをやりますとか、あと、近隣のカフェとかパブみたいなところが、じゃあ、うちがいつも出しているランチを持ち出せるようにして提供しましょうとか、レストランがピクニックバスケットに入れたゴージャスピクニックランチを提供しましょうというように、いろいろな主体が乗ってこられるところが、やっていてすごく面白いし、自分たちも発見が多かったです。都市計画の人とか、建築の人だけと付き合っていると分からないことがたくさんある。フードコーディネーターと一緒に仕事をしたり、そういうところから見る都市というのが全然違うし、いろいろな発想があるということに気付いて。

ピクニックじゃなくてもいいんですけれども、ピクニックというのが象徴的だと思っているのは、そういうアイデアを集めて、一個の場があると、私だったら、じゃあこういうふうに提供できますよ、こんなふうに楽しくできますよということができるんじゃないかと思いました。

最初に東京でやっていて、場所も不自由だけれども、ユーザーも不自由だと思ったんですね。結局、先ほど渡先生が出された、テーブルがあるけれども誰も使わないという状況。公園があって、確かにそんなに素敵な公園じゃないかもしれないけれども、ちょっと工夫

してやってみるとすごくうまくできるのに、そういう経験がないから分からないというところもあるので、そういうところをうまくあおっていくこと。体験を通して、ちょっとやってみると、皆、理解するので、自分でやってみようとか、それは参加する人だけではなくて、その近隣のお店も、今まではお店の中だけで食べさせていたけれども、普段出しているものを、ちょっと入れ物を変えれば外でも食べられて、それが周りの広場であったり、公園をもっと活性化できる。それは商売でやっているんでしょうけれども、結果的にそういうふうに商売を広げていけるし、公共空間の活性につながっていく。そういう発見を、ピクニックを通してしています。

そういうアイデアを持ち寄るようなやり方。先ほど、都市の本質は交流で、出会いからイノベーションは生まれるみたいな話をしたんですけれども、まさにそういうことだと思っていて、大きいビジョンを示すのではなくて、いろいろな人が持ち寄ることで、それを見ながら、「あ、そういうやり方があるんなら、うちはこうやろう」というふうに結構、皆、真似て学んでいって、その人しかないアイデアがまた出てきたりするので、そういうやり方というのは一つ、もしかしたら21世紀的なのかもしれないし、かなりピクニック的だなと思っています。

何か、どんな感じのやり方がいい感じかというご質問でしたよね。一つは。とりあえず。

松村　どうもありがとうございます。今日のゲール先生の話にはなかったですが、ご本を読んでいたら、まずアクティビティをデザインする、次に空間で、最後、建築という、こういう順番で物事を、特に都市にかかわることは考えなさいと。非常に重要なことだと思いますが。

今、伊藤さんにお話をいただいたのは、まさにアクティビティそのものを、潜在している人々の中に、まちを使ってより生き生きと生きていく、より豊かな人生を送るために、そもそもそれぞれの中に持っているものを少し表に出るような方向に誘導していくといいますか、そういう感じですよね。ピクニックというのは、わりとそういう余地が非常にあるものだということ、そういう理解でいいですか。

伊藤　そうです。ピクニックが嫌いな人ってあんまりいないので。

松村　うーん、どうかな（笑）。

伊藤　そうですか。すみません。嫌いでした？

松村　嫌いじゃないですよ。

伊藤　日本人は世界一食いしん坊だと思っているんですけれども、日本人は食べることが好きなので、おいしいものが食べられるのはなかなか、皆さん、好きかなと。それをあおっていくという感じです。

松村　そういう意味では、ピクニックというのはなかなかいいメディアですよね。

伊藤　そうですね。

松村　西村さんの場合は、最後の例だとコンテナをそういうものと位置付ける。

西村　コンテナというか、原っぱですね。僕は公園とは呼ばないようにしているんです。

さっき、禁止の話が出たんですけれども、日本の都市空間はもう禁止ルールだらけで。

松村　管理されていますからね。

西村　要は、さっき、何かをしようという意欲を全部削がれる。ですから、ここの「わいわい！コンテナ」の空間は、さっき、渡先生の話にも出たんですけれども、公園とか、決まっていないんですよ。自由に使えて、ただ自己責任の世界でやっていますから、皆が、そういう世界だと、自由にいろいろやれることを考え出すんですね。子供たちも、おじいちゃん、おばあち

ゃんたちも、あと商売やっている人も、あそこで何かできるんじゃないかということを考え出すと、前に進むと思うんですね。

ところが、世の中、いろいろなところ。まあ、道路とか河川空間は、国交省さんのために言うと、最近、占用の緩和とか、いろいろなことに取り組まれていますけれども、いろいろなところが使いにくいですね。

ですから、一つは赤いサインを青いサインに変えていくというのは大事だと思います。禁止の赤ではなくて、何かをしましょうという青に変えていくという活動が価値があると思います。

松村　標語づくり、上手ですね（笑）。赤を青に変える。

西村　赤を青に変えていくというのが一つの方法だと思います。

伊藤　本当に日本の公園というのは禁止ばっかりなんですけれども、先々月か、ニューヨークに行きまして、ブライアントパークに行ったら、看板があって、「これをやりましょう」ということが書いてあったのが、すごく素敵だなと思いました。例えば、「写真をたくさん撮って、皆、持って帰りましょう」とか。「芝生は積極的に使いましょう」とか、あとは、「ブランケットを広げて、ピクニックを楽しみましょう。だけど、プラスチックシートは駄目よ」とか、いろいろなことが書いてあって。禁止のことも書いてあるんですけれども、まず「You are welcome to ○○○」というのが書いてあったのが、メッセージの出し方として全然違うなと思って、「これこれ」と思って、写真を撮ってきたのを、今、見ています。

松村　渡先生の椅子も……。渡先生を椅子だけにしてしまうのも大変恐縮ですけれども（笑）。象徴的に。もう最近、渡先生、椅子に凝っているから。

渡　そうです。本当は椅子だけじゃないんですけど。

松村　椅子は、いわば、誘発するツール。完成したデザインではなくて、皆が行動することによって、その場がある形になっていくという。

渡　椅子はツールとしていいと思います。椅子は今まで使われなかったのは、マネジメントが必要なんです。今まで固定していたんですよ。強制的にその場所に座らされる。

②公共空間活用に向けた
「オープンカフェ条例」の社会実証実験
（つくば市）

ところが、椅子の場合、自由なんだけれども、自由であるからこそ、マネジメントしないと、それが道路に出たらどうするのとか、盗まれたらどうするのという懸念が出てきます。ブライアントパークはちゃんとそのマネジメントはきっちりできていて、運営を忘れると、駄目だなということです。

先ほど西村さんがおっしゃったように、それがセルフマネジメントの世界に行ってもいいと思うんですね。たぶん、ピクニックがそうだと思うんですけれども。そういう形で、何らかのマネジメントの階層がちゃんとあれば、椅子が活躍できる。それがたとえ車道であってもできるのではないか。そういう気がしました。

松村　了解しました。いろいろ質問があったんですが、急に思い付いたので。

皆さんの議論の方向と、ちょっと違うものとして、例えば、佐賀でもあると思いますし、どんな地方都市に行ったってあると思いますが、大型のショッピングセンターができて、それに下手したらシネコンがくっついていて、駐車場が完備されていて、その店舗は大きな道に面しているというパターン。一つの開発パターンとして、今でも結構あると思うんですね。大都市

の中心部ではなくて、地方都市に特にあると思うんです。

さっき、コンパクトシティという話も出ましたけれども、今日、お話ししているのは、どっちかというと、そうではない話もありますが、まちなかでもともと人々がわりと歴史的にどっちかというと住み着いていたような場所とかが、さびれてくるとか、高齢化してくるとかいうところを、もう一回賑やかにしようという話がわりと中心だったような気がするんですけれども。

大型の店舗なんかも当然便利なので、僕なんかも矛盾に満ちている人間だから、どんどん、「明日なんか映画行っちゃうからね」という感じなんですね。そうすると、ああいう場所での賑わいがあるわけですよね。子供も来て、子供が来て楽しいというなら、あそこへ行けばいいじゃんという考え方が当然あるし、ある種説得力を持ってもいる。

ああいうものとの付き合い方というか、目指す方向、ここが違うんだとか、こういうところが違うよねと。あっちもいいけどこうだよねとか、あれは駄目とか、いろいろあると思うんですが、どうなんでしょう。

西村　今日はスライドを見せていないですけれども、僕、いろいろなところで、まちなかの大きさと郊外店の大きさを同スケールで重ね合わせということをやっているんですけれども、ほとんどの都市が、中心市街地の商店街の大きさと郊外ショッピングセンターの大きさが平面的に同じです。昔の商店街の範囲というのは、そもそも歩いていける範囲でしか広がっていないわけですね。郊外店はおそらく、そういうところをちゃんと勉強していて、あのスケールを決めているんですね。ということは、あそこに行って１日中歩いているわけですよ。上に昇ったり下に行ったりして、歩いて楽しんで、夜ご飯食べて帰るぐらいまでいるわけで、ということは、ひょっとするとまちなかにもっと安全な環境と楽しい環境があれば、歩くのではないかというふうに思っているので、原っぱにしているんですね。

これからの都市の改革に大事なことは、まちの中に学校をなくさないことだと思います。今、「わいわい！コンテナ」に子供たちが来ています。なぜかというと学校が近いからです。今まではその子たちは、自転車とかで郊外店に行っていたんですよ。ところが、近くにこういう楽しい場所があって、子供たちが集まるようになると、どんどん集まるようになるんですね。学校が近いんですよ。

これから、まちづくりの中で、統廃合で学校をなくしたり、遠くに持っていっちゃったりするんですけれども、絶対に小学校とか幼稚園をまちなかからなくさないことだと思います。それをなくしたら、もう二度と子供たちは郊外店から戻ってこない。

ですから、佐賀は、本当に教育水準の高いといわれている小学校が近くに密集しているので、その子たちが来るようになって、その子たち、子供たちがまちを経験するから、10 年後も 20 年後のその子たちがまちづくりをするわけですね。子供たちが来なくなったら、まちづくりは終わると思います。そういうふうに思っています。

松村　何か、本当に説得力があるな。それは何だろう（笑）。

同じ質問で伊藤先生、どうでしょうか。

伊藤　プレイスメイキングの意義とも関係があると思うんですが、それ自体の経済効果であるとか、それから周辺への波及というのもあるんですけれども、もっと長期的に見ると、やはり都市の多様性を認識するとか、そこから社会性を育てるみたいなこととか、シビックプライドを育てるとか、創造性を育てるとか、そういうことがあって、たぶん短期的に判断できない長期的に評価すべきことというのがあると思います。

第２回の座談会の報告で、まちには変な人がいて、それがすごくいいんだというふうに言っていたんですけれども、やっぱり、ショッピングモールってあんまり変な人がいないですよね。だいだい想定内の人がいる。まちにいると、確かに変な人がいるんですよ。私もそういう人がいるのが結構健全だなと思っていて。

ただし、東京なんかだと、電車に乗っているとすごい満員で、周りをシャットアウトするしかないじゃな

いですか。人は大勢いるけど、周りのことを見ない。多様性ももう分からないというふうになっていて、適度な賑わい、まさに適度な密度の場所だと、そういう、「ああ、あんな人がいるな」というのも含めて、見ることができる。

今、どんどんインターネットとか、ショッピングモールもそうでしょうけれども、自分の選択する情報だけに閉じこもることができるので、本来、都市が持っている寛容性みたいなものが失われているのではないかとも思うんですね。ベルリンでバスに乗ったときに、車いすが乗ってきたら、高校生ぐらいの子たちが、当たり前のようにぱっぱってスロープを出して、自分たちで乗っけていて、そういうのって日本ではもう絶対に見たことがないし、自分もどうやってやったらいいか分からないし。このように、共助の感覚であるとか、いろいろな人がいるということを知るのは、やっぱりまちなかだし、それが長期的には社会的コストを下げるのではないかと思います。

あとは創造性の話で、自分で何か手を加えられるかどうか。ショッピングモールはたぶん加えられないというか、自分の表現ができない場所だと思いますが、まちなかだと、特に地方都市だと、先ほどの「わいわい！コンテナ」もそうですけれども、今、もう結構自由にできるので、そういうところがだいぶ違うかなとは思いました。

松村　よく分かりました。渡先生、どうぞ。

渡　方法はいくつかあると思います。まず、私が昔試みたことがあるのは、大きなショッピングモールの中に、周りに昔からある商店街のコンテンツを持ってくる。商店街のいろいろな主を連れていって、パラソルショップを開く。つまり、商店を大型商業施設に持ってきちゃうんですね。モバイルです。ただ、それはちょっと限界があるんですね。やっぱりオリジナルの商店街のよさがなかなか伝わらない。それが一つです。

そこに今度は、大型商店に来る人にその現場に行ってもらう。それも一つ、メディア戦略的なことです。

それからもう一つは、例えば、大型商業施設というのは周りに駐車場がたくさんあります。そこに公園を合体して、公園側は、せめて開いてもらう。普通、全部閉じているじゃないですか。あの閉じた状態をちょっとだけ、そこだけでも開けてもらって、公園とくっつけると、おそらく、そこに何らかのインタラクションができるのではないか。それは仙台のゼビオドームというところで若干、それっぽいことをやっています。

それからもう一つは、これはアメリカでやっている事例ですけれども、完全にモールをばらばらにする。大型のモールもよく見ると、スーパーマーケットレベルの大きさと、あとは小売りです。それをばらばらにして、まちの中に合体するんです。つまり、まちの中にばらしたパーツを入れて、普通の街路型、ストリート型のモールにしてしまう。これはシリコンバレーでもやっていますし、そのときに重要なのはマネジメントする、つまり、エリアマネジメント的に大型商店としての塊をマネジメントして、そこに公園を入れたり、ストリートを入れたりする。そこも一緒にマネジメントをしてもらって、そこにプレイスメイキングを少し付加してもらう。

その３つぐらいがあると思います。以上です。

西村　一つだけいいですか。ちょっと思い出したんですけれども、郊外店の話で、逆に、何で郊外店で駄目なのかという発想でいくと、大型ショッピングセンターは中心市街地の商店街と同じ大きさだと言いましたが、撤退したら全部なくなってしまうわけです。でも、ああいう小さい集合体の商店街とか都市というのは、１個ぐらい店舗がなくなって、また入ってきたり、どこかがちょっと調子が悪くても、周りが応援してくれて、ちょっと直っていったりみたいな、何かもさもさ、もさもさ、新陳代謝の激しい感じ。

松村　ある種の冗長性がある。

西村　ありますよね。ですから、大きな箱で一つの企業が担っているものに頼っていると、いつか大変な目に遭うということが目に見えているんですね。

ですから、もう一回、まちなかの小さなものの集合

体を建て直すということに全力を投じていったほうがまちの未来というのは明るいのではないかなと思います。

松村　ありがとうございます。

もう時間になりました。あと3分です。まとめですが、これ、まとめる必要がないですよね。だいたいまとめてもあれですけれども。

今日は、冒頭申し上げた、例えば、国交省さんがこれを主催しているとか、民間の方がお集まりだという、それぞれの考えようとしていることに、ある種、ずばり答えが出るということでもなかったような気もしますけれども。だけれども、僕自身は疑問に思っていたことで、今のお話なんか、完成図面を書くとか、竣工したらできたとか、スタティックな状態で物事を考える時代があったわけですね。状況的にそういうことを求めている時代では確実になくなってきたときに、どういうタイムスパンでどう評価するか。短期だとこうだけれども、長期だと子供が育ってまたまちづくりになるなんて、世代を超えてという話だったり、もちろん、大型の店舗も別に悪いわけじゃないですけれども、それは短期にはぐるぐる回るかもしれないけれども、歯抜けになっていったりなんかということでもないよねと、どういうタイムスパンで自分たちのまちが持続的に、ゲール先生がおっしゃったようなサステナブルなまち、何か生き生きとしたまちになるか。そういうものに変わりながらなっていくんでしょうけれども。

そうすると、これから都市について何か意思決定をする立場の人や、投資をしようとする人や、あるいはそれにかかわっていこうとする人たちの示すものというのは、まだ何の定型もないと思うんですけれども、それを考えていく時間軸を相当入念に入れつつ、考えていくような時代なんだなと、門外漢なりに、皆さん、新しいテーマが見つかったんじゃないのという気持ちで聞いておりました。

ということで、時間がまいりまして、3 人の先生方のお話、私は非常に特殊のことが多く、ゲール先生、お二人の冒頭の講演と、直接的にぐっと並んで理解できるかどうかは別として、非常に関係を持ったお話を3 人の先生からしていただけて。この後、飲みに行きましょうか（笑）。これだけでは納得できないことが結構あるので。

司会の方からご紹介があると思いますけれども、今の話を受けて……。受けるのは難しいと思いますが、ここで最後にゲール先生に感想をいただくという大変貴重な時間がございます。

これでこの場は終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。（拍手）

■シンポジウムに対する感想

ヤン・ゲール氏

ゲール　発言の機会をまたいただきましてありがとうございました。また、皆さま方には大変深い午後にしていただきましたことに御礼申し上げたいと思います。たくさん学ばせていただきました。世界各地の人にインスピレーションを与えるような、そういうお話が出たと思います。

こういう3つのシンポジウムが前に開催されて、今日、ここに私どもが集まっているということは、それ自体、非常にいい徴候だと思います。国交省さんがこれを組織しておられて、公共の領域の問題、あるいは都市の質の問題に非常に関心が高まっているということで、大変いい徴候だと思うのです。

振り返って、デンマークで学んだことを考えてみますと、長年、首相から最も若い学生まで、人々の考え方というのも変わってきた。数年前、車を増やすとか、もっと建物をつくるとか、非常にテクノクラート的な思想が中心でしたが、次第に、ビルをハッピーにするんじゃない、車をハッピーにするんじゃない、都市づくりをしているのは、そこに住んでいる人たちを幸福にするためなんだという考え方が広がってきました。そういう考え方が表れてきています。例をお示ししましたデンマークの建築の政策においても、人を優先するということになったわけです。これは新しいことなんです。

私のプレゼンの中でもご説明しようと試みた点ですが、近代主義において、人間の定住に関するやり方と非常に違うやり方を導入しました。まずビルを置いてみる。ビルが置かれると、今度、窓から顔を出して、少し余分なスペースがあるかどうかということを見て、それから、景観、造園士に造園などをしてもらったわけです。実際、もう一度見てみたら、人が誰も集まらなかった、ふたを開けてみたらそうだったということだったんですね。

私の本の中では、私どもがまちづくりを変えたのだと特に強調しました。つまり、まずビルを置いて、それからその空間を見て、そして少しそこにアクティビティを入れた。方向を変えたんですね。過去の歴史では、まず、定住地には何かアクティビティがあって、そこに空間をつくって、それからビルをその空間につくると。これは近代主義によって全く変わってしまったわけです。

そして、多くの意味で、50年もかかって変わってしまったんですが、今まで忘れられてきた人間について、より知るようになったわけです。そして、大変な努力をしていろいろな証拠集めをして示したわけです。古い都市、昔の都市には非常にいいことがあった。古い都市から、古いまちから学べることはたくさんある。人によって、人のためにつくられたまちなんだ。その後、過去50年はクレイジーなプランナーたちが交通中心のプランニングをしたり、あとはビル中心のプランニングをしたわけです。

若い人から高齢者までの全ての世代の人たちが快適な、住みやすい、そしてよい生活ができる空間をつくっていかなければならないんだという認識が、今、芽生えているわけですね。

数年前、私は結婚50周年の祝いを妻といたしました。そして妻と2人で自転車に乗って旅行したんです。コペンハーゲンの周りをサイクリングして、食事をし、そして自転車で帰った。20キロだったんですけれども、妻とこのイベントについて話したんですね。こういうイベント、自分の都市をこういうふうに体験するということは、私どもが結婚したときには可能ではなかったと。長年かかってこれが実現したんだという話を50周年の結婚記念にしたわけです。50年、毎朝起きたときに、その都市がきのうより少しよくなっていたのです。まちが少しよくなっていたんです。これは非常にいい気持ちです。私の子供たちは20年前よりはよりよいまちに過ごすことができるし、孫たちはもっとよくなったまちに住むことができるのではないかと思ったのです。

多くの都市があって、きのうより悪くなっている都市もあるんですね。それは私も知っています。

今日、ここの場で皆さんはこういうことを議論なさったわけですけれども、まちの主要な問題は、ヨーロッパでなければアメリカでもない、日本でもない。途上国の急速に成長する都市が問題を抱えている。ただ、これは話としては別の話になりますが、私は、より関心を持つというところに出発点を置いたんですね。歴史を通じてホモサピエンスがどうやって定住をしたか、そして、50年間、どういう途絶が起きたかということ。そして、今、十分な知識を持って、10年前よりはよいまちづくりができる、20年前よりよいまちづくりができるという状況になったと思うのです。

このシンポジウムを組織なさったこと自体、いい方向に進展しているんだといういい徴候だと思います。このシンポジウムの組織者に対してご賞賛申し上げたいと思います。

また、ご招待をいただきましたことにも御礼を申し上げたいと思います。日本で起きていることを拝聴することができました。

スヴァー先生と私にかわりまして、深く御礼申し上げたいと思います。ご幸運をお祈りしたいと思います。

毎年、昨日よりはよいまちづくりをしてください。そして、2030年には必ずやよいまちができていると思います。ご幸運をお祈り申し上げたいと思います。

司会　ありがとうございました。今一度、大きな拍手をお願いいたします。（拍手）

Panel Discussion

Syuichi Matsumura(Moderator), Hiroshi Nishimura, Kaori Ito, Kazuyoshi Watari

Moderator,Syuichi Matsumura: [speak in Japanese] Thank you very much. We'd like to start the second part of our program. We seek your kind cooperation. I'm really a layman, I'm outside of the field of expertise of this meeting, so a lot of you may be saying, who is Matsumura? Matsumura who? But if you position me in a square, not over coffee but over beer, I could stay many hours in a square. So that's the kind of person I am.

The symposium is such that, as has been introduced, since September we have had three symposiums in relation to the topic which is being discussed today and we have Prof. Gehl with us for this meeting. Perhaps we could take into consideration the three symposiums and we could summarize and sum-up the discussions, previous discussions, and conduct in-depth discussions. Has anyone in the audience been here for the earlier conferences, the three earlier conferences we had before? Yes, we have some enthusiastic people but more than the majority have not participated.

And I'm sure you have this with you. This is a handout, and if you open this up, on this side, this is just to relax your eyes. On this side, this talks about the previous three meetings and which members have participated. So I'd like to briefly have the speakers introduce themselves but let me just mention the titles.

The first session was moderated by Prof. Nishimura: renovating city buildings by leveraging existing stock. You have a situation where the buildings are not rebuilt and we have a lot of vacant buildings and we have to think about leveraging these, making use of these in building cities. From the afternoon society we had Mr. Yoshitsugu Shimizu and we had Mr. Naoto Matsui for the first session.

In the second session we had Prof. Kaori Ito, I mention her name in full. She's the only one I'm mentioning the name in full. Kaori Ito has moderated the second session, and Mr. Miura. Mr. Miura is a marketing researcher, and Mr. Kurosaki, these two gentlemen have participated. From a different angle of city building a discussion took place, activities in cities and urban areas. These people actually promote these activities, so they talked about designing activities and situations.

And someone who is famous for buying a lot of chairs, from Tsukuba University we have Prof. Watari. I was surprised to hear the number of chairs he bought. How many chairs are you planning to buy? Prof. Watari will moderate the third session. And from Hertz environmental design, Mr. Suzuki, and from Nippon University we had Prof. Mitomo take part in designing spaces which

are lively and comfortable.

And I forgot to mention the title of the second session: designing situations and activities.

In a nutshell, we'll be talking about what was discussed, so you needn't have participated in the past sessions. You'll 100 percent information about the past sessions, so we'd like to hear the moderators sum up their sessions. Ten minutes each please.

Nishimura: [speaks in Japanese] My name is Nishimura. In the very first symposium, leveraging existing stock, renovating urban planning, and on September 3 we conducted this symposium at 3331 Arts Chiyoda.

Well, ten minutes is the given time and it's almost impossible, so I will try my best. And this time, well, I have was having some challenges to address, and the place-making, there is a big boom and also here in Japan we are to pay attention to people, and from the users' side we are to look into things. I think this time has come in Japan.

But having listened to the presentations earlier, I was not really well convinced as to how this would be linked to urban planning. Well, just organizing events and people just having fun, that would really be the solution because it's just one time, a one-off event, so we really have to link them to effective urban planning and development. So that is the thrust of the intention on my part.

And urban problems specific to Japan. Depopulation and a hyper-aging society and a declining productive population, and we are seeing a shrinkage of the cities and so we need to address all those related issues.

And leveraging the existing stock. There are so many empty houses, 8.2 million units throughout the nation. And also in terms of the ratio of empty houses in total, 13.5 percent, and so we have more empty land, more of that compared to these empty houses, so I was not really well convinced as to what has been presented because they have focused on major cities and large cities, and then if they do such activities they will be able to attract more people because even if you are to stop car traffic, then people can just use public transportation, but in the more outlying regions and outside of a major metropolis we will not be able to really have traffic, and I just have erased the name of the city, and this is it.

This is what we will see. Everywhere we go out of major cities, this is what we would see. And so how to save them? And I think in Tokyo we are going in the same direction, and I think all this these cities in the outlying regions are really going ahead of Tokyo, and so what will work in these four cities will work in Tokyo.

コンパクトシティ
実現可能か

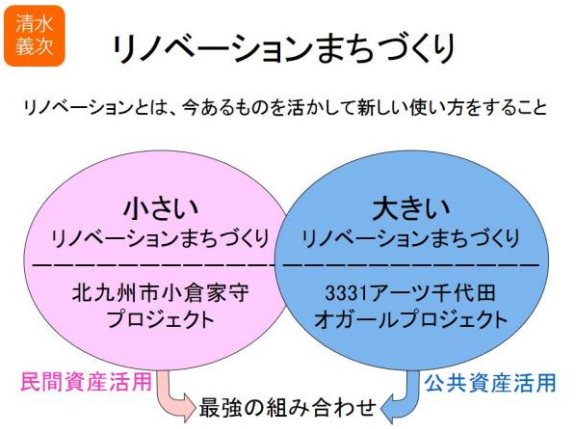
And the compact city, is this really feasible? This is the very first discussion point in the first symposium we had.

松井直人 松井直人
×
清水義次 清水義次
×
西村 浩 西村　浩

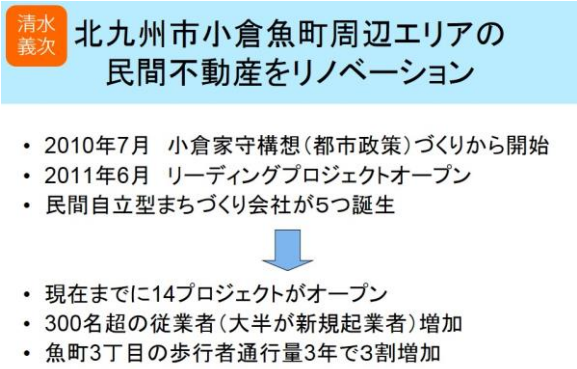
And so there are three of our people, Matsui-san and Shimizu-san and myself, and these are the icons put together because you will be able to find out who said what.

小
リノベーション
×
まちづくり
大

And renovation times the community development, and so these are overlapping, and I think this is very significant because renovation, renovation is a very, very small thing, and how could that be reflected on urban planning or community development, and so starting from the smaller ones all the way to the big ones, and then here I think that the place-making principle will work.

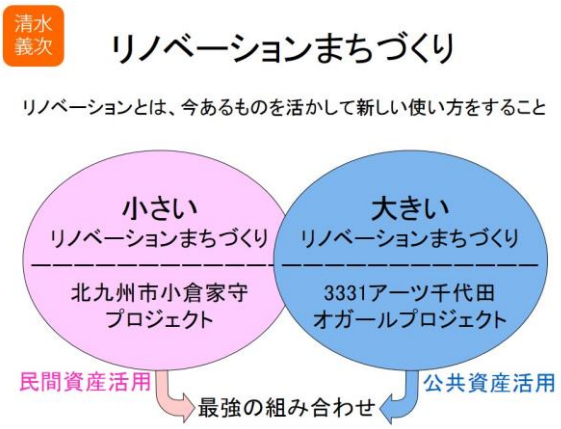


And Shimizu-san, this is the slide shown by Shimizu-san. And starting from renovation, urban development, and bigger renovation of urban planning. And the small one would utilize private sector assets and the larger ones would make use of public assets and we have to really have a strong combination of these.



And the small one in Kokura-yamori Project and then utilizing private sector assets, and so there is big empty private sector real estate and so we are going to divide them into small lots and have more activities.

And as shown here, more than 300 employees were newly created. And then a 30 percent increase in pedestrian traffic in the last three years, and so we see this type of activity by young people in Mercator, the third street.



And on the other hand, the larger one is utilizing and leveraging public assets.

And then the Ogal project, and this is a PPP type of activity utilizing and leveraging developed land owned by the local municipality, and this is to take advantage of that.

オガールプラザの雁木空間(幅4m)

And then on the left-hand side Ogal Plaza and the right-hand side Ogal Base which is an accommodation facility.

And then inside you have a very open space. And then also you have this covered space. And to just erase some of the borderlines between the buildings and open space.

オガール広場の芝生でくつろぐ地元の小学生たち

And out then in urban space there are lots of children coming.

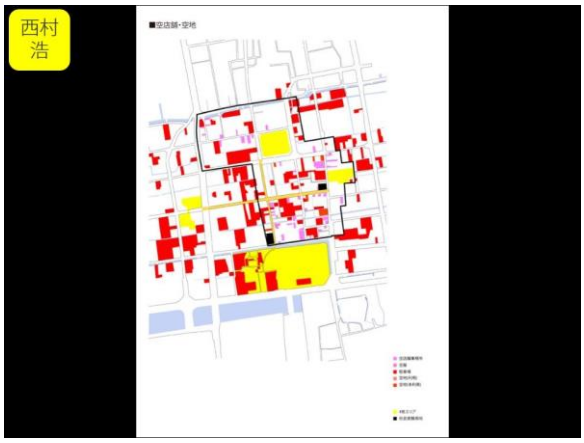
オガール広場を使った　オータムワインガーデン

And at night time one garden, and so people would just enjoy dining and also drinking. The population is just over 20,000, but this is what we see in this small Ogal Square.

And I'm from Saga, and the Waiwai Container Project is a project. And this is a 21st century-type concept, and then as we see, empty land and the town will become more vibrant.

空き地が増えると街が賑わう?!
佐賀「わいわい!!コンテナ」プロジェクト

And then if we have that empty land, in the 20th century we tried to fill it with buildings, but as we are going to see a decline in the population we won't be able to fill the urban space, so my hypothesis is if we have large areas of empty land then society will become more lively and so we would have this urban space filled with grass and bring in containers. And not just on weekends but on weekdays as well we are to have more people, and this is the social experiment we are conducting.



And this is what it is like in Saga City, and there are so many parking spaces, outdoor parking spaces, and there is not much public transportation so old people have to drive a car, and so for empty spaces they will just establish parking spaces, but we really have to stop this. And so we are experimenting with containers.

This is the second type. And then there is a creek and then we have a different set of containers set up.

And as a result, this is the sort of night town where there are so many bars and others, but in the daytime we have all these children coming and also their mothers will come here and go shopping.

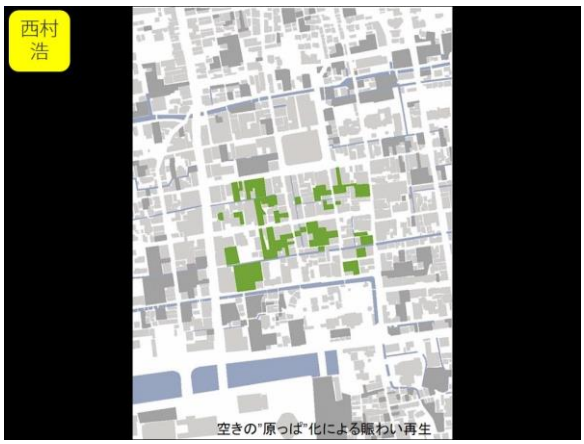
So this photo was taken in the summer this year, and the mothers get together and then they are really talking about some of the challenging issues of raising children, and so they will be coming together and enjoying their time. It's not that all you need to do is build a condominium but you really have to create such a situation where people can get together.

松井直人 清水義次 西村浩

「空き」の価値を考える

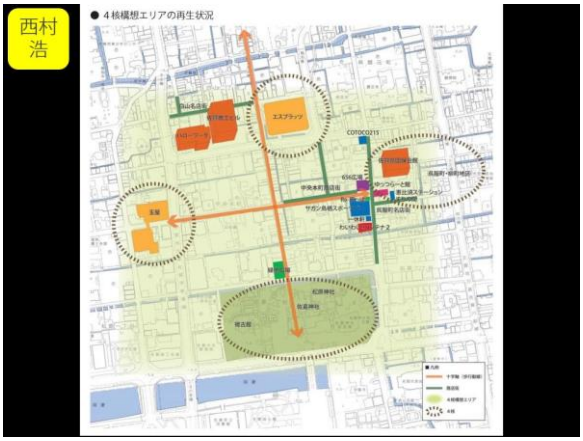
空き地のマネージメント

And all these three people said this. The value of vacancy and this should be thought about, and so the management of empty land.



And this dark grey portion is the outdoor parking spaces. And so why don't we just make them into an urban field, and it's not that we are going to build parks under very strict regulations but we are to make all these an open field with grass, and so we just will invite all the children and have grass planted.

And the photograph that you saw earlier was the actual open field, the field of grass, and that grass was planted by children,



And there are so many phenomena taking place, and the younger people and also there are more shops and stores being established.

And so this was the one four years ago what this shopping mall looked like, and then if you were just removing it, all this was an arcade.

西村
浩

And because of this the shops went out of business, and so you have the containers and a ramen shop, and then a sports bar, and then you have all these young people coming, and so a T-shirt shop was opened and all the people realized that there is a difference.

松井
直人

コンパクトシティ

公共交通機関・自転車・徒歩を移動手段の中心とした
集約型のまちづくり

So Matsui-san talked about this major theme of compact city and what he said was public transportation and bicycling and walking should be made the means of mobility, not cars or vehicle transportation.

松井
直人

都市とは何か？

「都市は、多様性が自然発生的に起こる場所であり、あらゆる種類の企業や、アイデアの孵化装置である」

ジェイン・ジェイコブズ
「アメリカ大都市の死と生」(1961)

「何か」が起きるためには、
人と人が触れ合わなくてはなりません」

エドワード・グレーザー（ハーバード大学教授）
「都市は人類最高の発明である」(2012)

33

And then the cities need to offer diversity. It's not just a workplace, not just for a living, and then various people need to get together, and also various types of enterprises should come together.

松井
直人

コンパクトシティ

公共交通機関・自転車・徒歩を移動手段の中心とした
集約型のまちづくり

人間中心の街
＜人がいるところに人が集まる＞

Also we have to really offer an environment where people can take a walk slowly. And the compact city, we would be seeing a human-centric type of city developed, and that was what Mr. Matsui said.

松井
直人

線引型から誘導型へ

プレイスメイキング

And a very important essence of what Mr. Matsui said is in the past we were really having zoning-based urban planning and as we had all this with different zoning then you would see expansion of the city, but nowadays we are seeing a shrinking of cities, and so it's not that zoning would work. So you really have to motivate people to come closer to the center of the city, and this is an induction type of urban planning and I think the place-making concept would work.

松井直人 清水義次 西村浩

道路と駐車場

(25%) (20%~30%)

50%以上の空間を車が占拠

And what all three people said in common, we have to do something about roads and parking lots because out there in the outlying regions the roads occupy 25 percent of the space and parking spaces occupy 20 to 30 percent of total land area. So in these cities or communities more than 50 of the space is being occupied by cars, and so the conventional type of urban planning would not work, and this is obvious.

清水義次

公も大きな不動産オーナーである

松井直人 清水義次 西村浩

公民連携
パブリックマインド

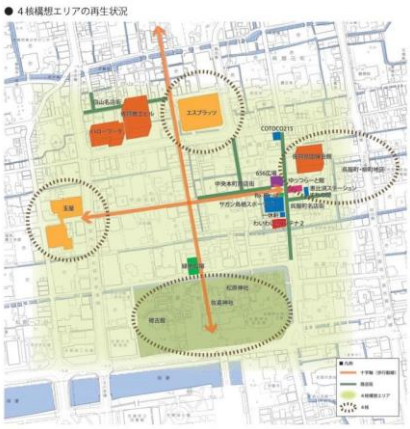
Not just the private sector, but the private sector is also a very big real estate owner so we really have to a public and private sector partnership and we have to really generate more of a public mind.

清水義次

敷地に価値なし
エリアに価値あり

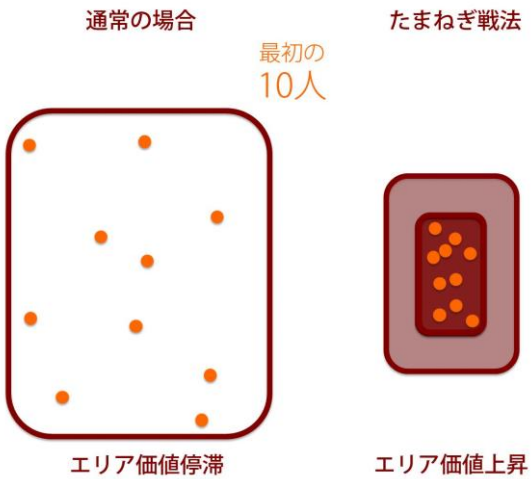
And what Mr. Shimizu said was the site has no value but area does, so each of the sites own by the private sector doesn't really have value, but we really have to have various activities taking place in the area and the value of the area is going to be enhanced.

西村浩

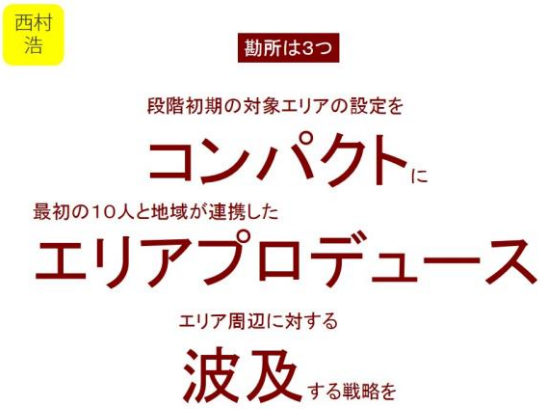


And as a summary I talked about the onion practice. You can just laugh at this idea because you really have to activate and revive your areas and you have to deal with a very large area, and so at the core of the onion, all these people were dedicating their efforts.

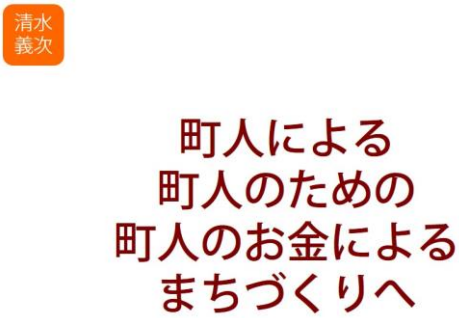
Let's say that you want to have 1,000 people coming to this town. And then if you just invite them, only 1 percent would agree to that idea. So in the initial phase you will have just ten people, and how these initial ten people take action would really make a big difference.



And the conventional way of doing this would set the area, and then you are always designating such a big area, and then if you have ten people coming in, this is what we would see as their behavior. So if you have a wider area, the area value would not go up and there is no vigor. However, if you have a very compact and small size area to focus on, then the activity would be very much enhanced and then that would have a ripple effect on the surrounding areas of the small core area. So this is what I refer to as the onion tactic. And it's not going to be that you will see this size become equivalent or the same size, but naturally each community will stop growing at a certain size and that is the sort of inherent size.



So there are three points: making it compact, and also we would have the first ten people to work hard to really activate the area, and also think about the strategy to have a ripple effect on the surrounding area.



And also, this is what Mr. Shimizu said. By the town people and for the people and funded by the people's money, so not by the private sector or local communities but all these community people need to work hard for their own people, so the message is not to depend on subsidies. Thank you.

Moderator: [speaks in Japanese] For Dr. Jan Gehl's purpose I would like to ask a question on the Waiwai Container Project that you talked about. The first one is 1 million, the population in Kitakyushu, and the next example you referred to Shiwacho and a 20,000 to 30,000 population size.

And your hometown Saga, what is the size of the population? And this is where the prefectural capital is located. And then before the merger, 150,000, and now after the merger of the new municipalities, the population is 230,000, so that is the reason I am advocating this onion tactic.

Moderator: I'm sure we have more questions to ask but we'd just like to go to the next speaker. Next is Kaori Ito. Prof. Ito, please.

Kaori Ito: [speaks in Japanese] This is the backyard of what you heard in Saga, the Saga project. This is the lawn, a picture of the lawn he talked about. Well there was a wonderful summary from Mr. Nishimura, and following suit will be a very difficult task for me to fulfill. But I was in charge of the second forum. The theme was designing situations and activities, and these are the three members participating.

Mr. Miura is a marketing researcher. Originally he worked for the Across journal. He was chief editor of PARCO and through that position he has been observing changes of society. And Mr. Kurosaki is the founder of IDEE and he is a producer and promoter of various projects. And we held the firm at the UNU, and on that day, in front of UN University there was a farmers' market that he produced. And also in the 246 Common in Omotesando he also planned for that project. And as was introduced, I am conducting research on urban planning and also I produce Tokyo Picnic Club events. Using urban public space, how do you make it a fun place? That is the type of all the activities that we conduct. I am a so-called picnician, promoting picnics.

And so we talked very freely. Unlike the first forum we didn't have any goals, no problems or question-setting and no discussions leading up to any solutions and answers, so it was rather disorganized. But first of all we talked about city life and city culture. That was the main topic that was mentioned by the two gentlemen. So we talked about comfortable places, what is city life that we are observing these days.

Mr. Miura says that he works in Nishiogi and every day he wanders at different stations between Nishiogi and Nakano. He goes to the public bath in

Koenji and drinks in Nakano and he is happy to have so many places he is attached to.

And Kurosaki-san said that in the older days, many years ago, there used to be unique people in town. He made friends with the homeless who cleaned up the streets or grumpy old women or black guys selling umbrellas, and those unique people he made friends with, and that gave him some excitement or sense of relief from daily tension he said. And now he collaborates with unique youth in conducting his projects.

So listening to their stories, we came to the conclusion that the essence of cities is in the exchange and interaction among people and I think that is what people desire when they live in the city.

Three of us, all of us were born and raised in Tokyo, so unlike the first forum discussion, the contents of the discussion took a different direction. We focused on Tokyo. How can we make it a more friendly city for people and make it a lively and interesting place for people to live in?

So the essence of cities is the exchange of people. That is what I asked the two, and Mr. Kurosaki said that most inspirations emerge from dialogue and conversation. Without conversation there's no inspiration, that is what Mr. Kurosaki said. And something interesting was mentioned by Miura-san, which was that a good level of gathering is important. Mr. Miura said that a comparison of Kichijoji and Nishiogi where he is based, he says that the opportunity to meet someone and discuss ideas of the future are much more abundant in Nishiogi compared to Kichijoji, he said. Kichijoji, to meet with people, there many to be too many people in order to have personal conversations, but Nishiogi is a good gathering density so you're able to meet people and talk about different ideas.

There was a photograph to the right of the yakitori restaurant and there are many such gathering places in Nishiogi. There are young people; there are old people; there are non-Japanese people also gathering in these places. And the town itself serves as a share-house and the yakitori restaurant serves as a living room, and coincidentally you sit next to someone who conceives a good idea and you start a project together, so the city can serve as a job placement agency, so to speak.

And then we talked about work style. In Nishiogi shops are run by owners who live in the neighborhood and not by part-timers or students and so forth, and that is why there is a sense of place and place-making. And so their affection for the city and engagement with the city is so different. So in order to make a difference in the city you have to change the way you work, in other words, not be employed by someone and go and commute to a different place; you need to work in the place and own the business and that will lead to affection for the city.

And also we talked about creative industry and so forth, but creative work is not about the profession itself. You can be creative in whatever work you are engaged in. It depends on your volition and intention.

And Mr. Kurosaki has a project called Midori-so, which is a share office located in Shibuya, a renovated old condo for creative people together, so he has that type of project, and also a lot of different professions get together and engage in creativity.

I talked about the concept of civic pride which is citizens' pride toward their city or community, and I said that this is not just about the love or affection for your hometown but it's pride that you have ownership of improving the place. Actively and creatively you are involved with the place or the community, and that is why you will have a sense of pride, civic pride, that is what I said.

And in the farmers' market that was held in front of the UNU building, and also Mr. Kurosaki has many other projects like that. I think this is Mr. Kurosaki's project, and also Nishiogi, the way people are living.

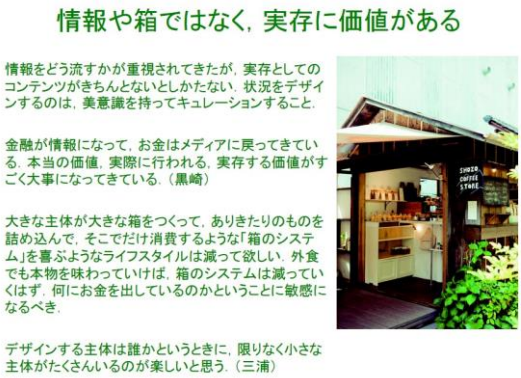
So looking at all this, we suggested that there's a change in the value of people, the system of values. The conventional value was to possess goods and consume goods, but now there is more value placed on active involvement to trigger change and there is an increasing number of people who are awakened to this type of new value. Of course there are people who have different values and changing values but there are also people who hold on to the same values, and there are always people who are sensitive to new values, and Mr. Miura said that those people 30 years ago would have shopped at PARCO and worn Comme des Garçons clothing. But now the avant-garde are attracted to old things rather than the new, living in a rural area, living in very old houses and traditional houses, and so they are more actively involved in creation rather than passively consuming things given to them.

And Mr. Miura said that he wants to write a book

on the skill of picking things up from the old and the existing, so rather than sharing now he is picking things up that are thrown away by others.

And Mr. Kurosaki said that the sense of values is ever-changing. Goods may not be selling well but tickets for food sold at farmers' markets sell out immediately, so people are discerning what is truly valuable. And there is a choice between inexpensive commercialistic condos or old but robust structures and it's determined by what you think is true value. And of course you need a system to trigger this type of transformation in the sense of values.

So the true value mentioned by Mr. Kurosaki, how can this lead to a very enriched life and a fashionable one, in other words, a system to make people perceive that as fashionable. That is the type of system or promotion that is necessary.



And the next topic was a society that values substance. In the past, information in boxes, the framework was necessary, but people lost sight of the substance and now people are revisiting the matter of content and substance. A designing situation means you need a sense of beauty aesthetics, not just transmitting information but curating the substance and content. And Mr. Miura talked about the box system, the big entities creating big boxes filled with mundane content, a consumption-oriented type of lifestyle. We don't want that type of lifestyle anymore. Going forward, for example, if you see true value in the restaurants you seek for example, then it will lead to a transformation. You must become more conscious of what we pay for. Is it just the fee for the big box or maybe the very cheap goods can have very good content.

And also there was the question of who are the designers? Mr. Miura said that it is more fun to have many small designers.

And the final topic we discussed is such a lifestyle or life culture in the city, there is the emergence of places in the city, and Mr. Miura said, I'm surrounded by people who are positively moving the city. They all enjoy eating. They are very active. They interact with interesting cities and villages and people, and they are doing many things. In those places they meet others.

And Mr. Kurosaki said that when you move around a lot your concept of habitation and stay becomes vague. When you're in a nice place for example, even a hotel can feel like your room. The picnic creates an outdoor living room for you or a dining room. And so concepts like living, staying, ownership, and sharing can change. So it's not like a fixed concept of you live here and stay here but a

place that can be flexible can emerge or be created in city life. So that was the final topic that we engaged in.

Moderator: Thank you. This is going to be a considerably difficult discussion.

Ito: Well, it didn't really become a discussion.

Moderator: It's like just chit-chatting in a drinking place. It's a very high standard. Prof. Watari, could you sum up the third round of discussions? The title is as was explained earlier.

第3回座談会

「賑わいや心地よい空間をデザインする」

渡　和由

Kazuyoshi Watari: [speak in Japanese] In terms of the substance, well, I borrowed from the slides of the other three participants.

Placemaking と都市デザイン

鈴木　俊治

ハーツ環境デザイン代表 ・ 明治大学客員教授

Prof. Suzuki talked about place-making and urban design or city design. Place-making and urban design are such that urban-making is about small areas and when you talk about cities it's a bigger frame, and both should be considered together at the same time. That was the point which was made. And then he developed his discussion into different areas.

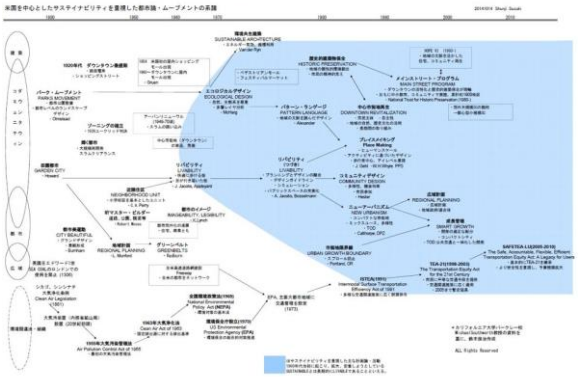
1. Placemaking に関連する都市デザインの系譜
2. Placemaking と New Urbanism
   ・鳥瞰レベルからアイレベル（ヒューマンスケール）まで、一貫したデザイン
   ・人間の活動を「主役」にしたデザイン
3. Sense of Place
   ・認識し、共有する
4. コミュニティをベースとした包括的な取り組み
   Main Street Program
   エリア・マネジメント

New urbanism and the close relationship it has with place-making is what he referred to. People's activities should be at the center of design. A sense of place is very important he said, and we should be renewing our awareness of this and we have to share the importance of a sense of place.

And community-based comprehensive approaches, this is necessary, and without this, place-making cannot be considered.

米国を中心としたサステイナビリティを重視した都市論・ムーブメントの系譜

カリフォルニア大学バークレー校MichaelSouthworth教授の資料を基に，鈴木俊治作成



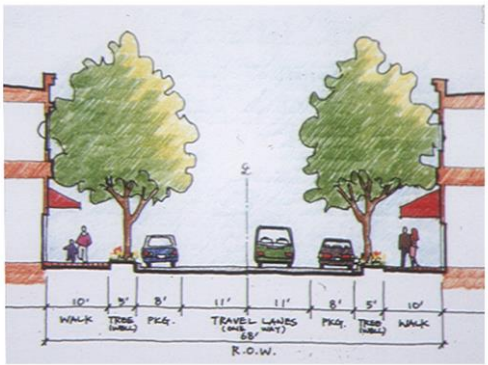
And this is not readable, I'm aware of that, but the handout which I put in your hands has this page, and this is original material that Prof. Suzuki put together.

A Berkeley professor created something and Prof. Suzuki developed that, and as his background

shows, he's of the Berkeley School, and new urbanism founder Peter Calthorpe's office is where he gained his experience. He worked there and he created this as a result of his experience. Different cities and the trends in city design are shown here, and place-making would be somewhere in the middle, right here.

New Urbanism の計画例 San Elijo, CA (Calthorpe Associates)

And this is something that was introduced before. Peter Calthorpe's office is where Prof. Suzuki worked and he was involved in an urban design site plan, and this is the plan which shows the use, and the location of buildings is shown here and the parks are shown here. This is not something that we normally do in Japan, but this is very important. You have the location of the parking spaces and the buildings, which direction the buildings face, whether they face parks or not, and that has to be considered at this stage.



歩道や接続するPublic Spaceでどのようなアクティビティを起こすか？

And the relationship between the street and the buildings. And in what public spaces what activities would be stimulated? That is considered from a very early stage. And Prof. Suzuki implements this and puts this into practice in Japan.

Sense of Place を確認し、地域で共有する（神楽坂通り）

This is the Kagurazaka Street Project, which was explained. And in this way, sketches are used to show what it feels like to be there, and he develops on that.

And this is another very important point. As I mentioned earlier, place-making is such that it's entertainment-related, it's very fancy and it's more urban. There is some of that but that is not all. What's very important is that you think about livelihoods, people actually earning their living, and you need to be aware of that in place-making.

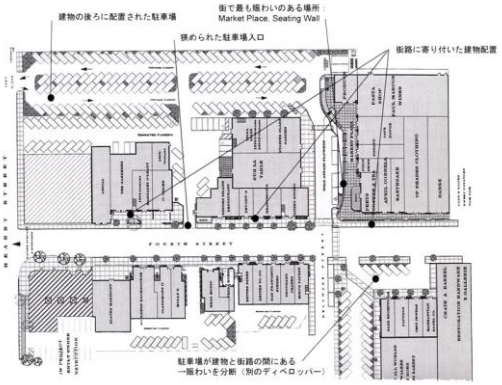
This is a picture from Southeast Asia.

誰もが、無目的に都市を楽しめる空間～きめ細かい都市デザイン

This was originally a storage space, a warehouse. It's Fourth Street in Berkeley. It's one street. It's an example taken from this.

自由に使える「まち」空間

Everybody can sit here, and you can buy things to eat and you can eat your food at these tables, using these tables, and you create places like this.



駐車場は表通りから見えないように配置

And this is the floor plan which shows how the buildings are built.

Main Street Program ： The Four Point Approach

組織 Organization
プログラム運営を適切に行い、関係機関と調整し、人材を有効活用し、合意形成を行うための最適組織づくりと維持

促進事業 Promotion
イベント、資金集め、投資誘発、広報、知名度PR

デザイン Design
街路、建築、オープンスペース、ストリートファニチャ、サインデザイン管理システム 等

経済立て直し Economic Restructuring
既存の経済基盤強化、営業支援、新規ビジネス誘致

And this is the Main Street program, which is one method. And that has been explained. I'm sorry I'm not able to explain this in detail.

成功のための8つの鍵

① 包括的であること
② 段階的に進められること
③ コミュニティが主導すること
④ 行政と民間の協働であること
⑤ 既存の地域資源を基にすること
⑥ 最高の品質（Quality）であること
⑦ 前向きの変化を起こすこと
⑧ 実現を前提とすること

And the eight key factors for success. This was presented by the speaker, and these are things that had been mentioned during the meeting. To retain the existing regional resources and emphasize quality and best quality, bringing about change which is forward-looking, and place-making approaches are important here.

And this is Prof. Mitomo's presentation, and this is the result of the New York School research which the speaker was involved in, and she put together a paper and the results were explained. This is Bryant Park. For three years or so she visited the place, and she would practically live in the park, from 7:00 in the morning to near midnight. She would visit three times a year in different seasons, and she went to the PPSs as well, and I accompanied her on some visits.

プレイスメイキングの原則

プロジェクトフォーパブリックスペース(Project for Public Spaces, PPS)が提唱

PMの基本的な考え方	1	PMでは、地域の人々も専門家である。
	2	PMにおけるデザインとは、居場所を創出することである。
	3	居場所となり得るような公的空間を創出・再生することは、一人では不可能である。
	4	(公的空間に関わる公務員を含んだ)専門家達は「それはできない」と発言するが、不可能という意味ではなく、経験(前例)がないだけである。
PMの計画手法と調査手法	5	PMでは、利用者や(利用されている)空間を観察することによって多くの発見や視点を得られる。
	6	PMで重要なことは、皆で共有できる理想図をつくりあげることである
PMでの考えを行動に移す	7	PMにおける形態とは、イベントや活動を支えることである。
	8	PMでは、(利用される)空間、活動、利用者のつながりを創出することが重要である。
PMの実践	9	PMでは、ペチュニアの花を植えるように一人でもできる小さいことからはじめることが重要である。
	10	PMの実践において、予算は大きな問題ではない。
	11	PMにおいて公的空間の居場所づくりに完成はない(ずっと続くものである)。

How to Turn a Place Around A Handbook for Creating Successful Public Spaces, PPS
邦訳 オープンスペースを魅力的にする―親しまれる公共空間のためのハンドブック,学芸出版社,
加藤源監訳, 鈴木俊治・服部圭郎・加藤潤訳

Prof. Suzuki translated a book and this is included in the book. Prof. Mitomo retranslated parts of the book. What is important is the part indicated in pink. To create a place is not possible for one person; it's very important for different people who are conducting activities there to be involved.

ブライアントパーク Bryant Park

プレイスメイキングの考えに基づいた再生プロジェクト

1980年頃まで:麻薬取引の場
↓
1992年:再開園
↓
現在:ニューヨーク市中心部のまちなかの居場所

・年間600万人以上の多国籍、多世代の利用者
・1人から多人数利用

出典:Bryant Park Map and Guide, BPC

■ ニューヨーク市における位置

And this is Bryant Park. In the beginning of the 1990s it was a place for drug dealing, and actually I went in the '90s and I saw people doing drug deals, but a sea change has come over the place. And this is the bird's eye view of the place from the top. Bryant Park is not a big place.

ブライアントパークコーポレーション(BPC)の運営

・年間600以上の無料イベント
・4500以上の可動椅子
・レストランとカフェ、BID、スポンサー等からの収入

■日比谷公園平面図
出典:都立日比谷公園マップ, 東京都公園協会

■ブライアントパーク鳥瞰図
出典:Bryant Park Map and Guide, BPC

This is a comparison with Hibiya Park. Compared to Hibiya Park, this is the size of Bryant Park. And there's a library there, so the actual space where there are 5,000 tables is a very small area. And as you can see, there are different restaurants and seats crowded together, and you can use these seats freely.

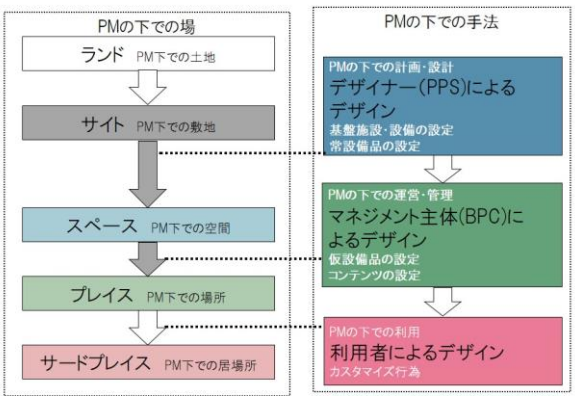
ブライアントパークから見たプレイスメイキング

公園に関わるすべての主体
物理的な場の設定を行う(デザインする)主体

3種類の居場所を兼ね備えた
まちなかの居場所として成立している最大の要因

1. 地域のコミュニティの中心としてそこに居る人達と積極的に交流する場として
2. そこに居る人達とただそこで時を共有(シェア)して過ごす居場所として
3. ほかに誰もいなくてもそこにいることで自分らしくいられる居場所として

ブライアントパークから得たプレイスメイキング(PM)の流れ



All the entities involved in the park, as I shall be mentioning later on. On the right-hand side, designers, PPSs, there are designers who do the planning, and then there's Bryant Park Corporation, a private sector company, probably a BID company, which actually manages the premises. And then there are the users. They would move the seats around and use the chairs freely. And these are all of the entities involved. And as is written here, it's a place for exchange, it's a place where you can share things, it's a place where you can be yourself, and that is the way the park is being used. And this is the result of the research she has done.

This is a little different from Prof. Gehl's chart. This is Prof. Mitomo's results from her study of Bryant Park. And this is what I did. I explained a little bit earlier, there's a little overlap with what I said earlier. This is one example in the United States which I wanted to show.

一人一人とまちが活きるプレイスメイキング

筑波大学 芸術系 渡 和由

This is a restaurant on a street for cars. It's in Mountain View where Google headquarters or Apple headquarters are located. It's a creative place and creative people seek places such as this.

■米国の事例 カストロ・ストリート(シリコンバレー)

車道レストランの座席

(駅前メインストリートを4車線から3車線に改修)

The place uses both the sidewalk and the road for cars. And this is called Castro Street.

①「みんなのイス」で市を支援(地震・竜巻の被災地)

600脚のイスで座席と食の提供／車は通行

And this is a totally different place in terms of ambiance. Six hundred seats have been placed here and it's a restaurant on the street, and we positioned the chairs here. Everybody uses these. We were wondering where people used to eat before we placed the chairs here. The person at the municipal office raised this question. And we placed these chairs and people use them.

被災した家の空地

And this is a city which has been hit by an earthquake as well as a tornado.

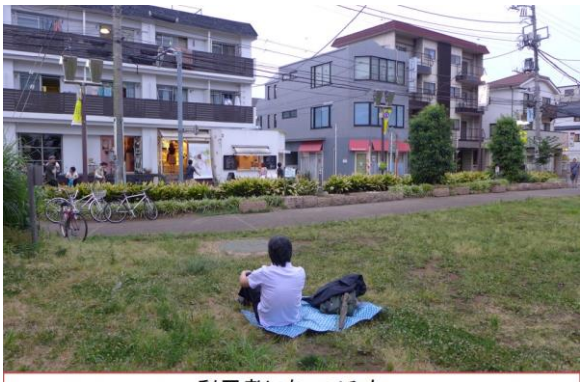
②公共空間活用に向けた
「オープンカフェ条例」の社会実証実験
（つくば市）

Tsukuba City is trying to enact an ordinance, an ordinance related to open cafes, and trucks are used, trucks which are restaurants are used, and this is an experiment.

③公園のピクニックを支援する店
ドーナッツ店（吉祥寺）

And this is an interesting experiment, and this is related to the picnic mentioned earlier by Prof. Ito. This is a store which promotes picnics.

ドーナッツ屋さんで何か買えば、ピクニックシートを貸してくれる



利用者になってみた
ピクニックシートで公園の芝生に座れる！

There's a donut store here and there's a park here, and if you buy donuts at the donut store or buy soy milk, they will lend you a sheet like this to sit on, and I actually used it. I used the sheet like a user. I was by myself and on my own but there was a rather picnicky spirit which was borne as a result of the use of this sheet.

④動く商店街による週に一度の「出かけ場」
買い物困難者への行商支援（北茨城市商工会）

And this is a place on top of a hill, also a place hit by an earthquake before, and there are lots of seniors. The Chamber of Commerce provides this service. There are trucks that come to this place. It's a square in a residential place and the trucks sell food, and from a 400-kilometer radius people come and gather. Once a week at the same time these trucks come to sell goods and people wait here for over three hours in advance to buy things.

⑤病院に接する歩道の座れる花壇

And these are some of the things that we have tried. And this is a place where plants and flowers can be planted on the sidewalk, and there are trees here on the sidewalk and kindergarten kids and even hospital patients come out on stretchers, and this is effective in actually getting people to move.

⑥江戸時代のプレイスメイキング　青空そば屋

出展：江戸庶民風俗図絵、三谷一馬

And this is from the Edo Period in Japan. Place-making was one of the fortes of Japanese in those days. This is not Bryant Park but this is a soba restaurant in Osaka

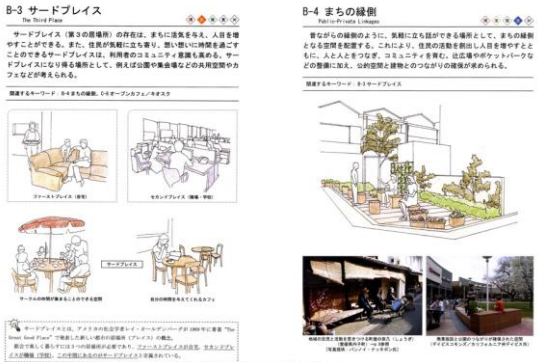
江戸時代の茶屋

開放的な店先・台所、屋内と屋外の多様な座り場

出展：江戸庶民風俗図絵、三谷一馬

And this is a teahouse in the Edo Period. You have like a veranda here where people are sitting. Some people are playing games and some people are eating and drinking. It's almost like Starbucks. It's an open place, an open space. And both the public sector and private sector are involved in this. Perhaps the Japanese are good at doing something like this.

⑦防犯環境設計における自然監視の場



出展：防犯まちづくりデザインガイド、~計画・設計からマネジメントまで、
樋野公宏、石井儀光、渡和由、秋田典子、野原卓、雨宮護、建築研究資料No.134、建築研究所、2011

And crime prevention environment design is a different project that we undertook. By place-making you can create an environment conducive to the prevention of crime. Natural surveillance is born in different places in the city.

⑧既存環境を活かす／簡単につくる／組み合わせる

7つの場

1. 座り場　（すわりば）
2. 眺め場　（ながめば）
3. 食 場　（しょくば）
4. 陰り場　（かげりば）
5. 灯り場　（あかりば）
6. 話し場　（はなしば）
7. 巡り場　（めぐりば）

※ 渡造語　重要な順

And this is the penultimate slide. Prof. Gehl showed the 12 criteria but these are seven factors that would enable you to create a place. I've simplified. Places to sit, places to observe, places to eat. If you have these three factors you can create an atmosphere like Bryant Park.

プレイスメイキングのポイント

- 人の場面(アイレベル・パースペクティブ)を意識
- 場の運営に継続的な手間(サービス)をかける
→ 魅力的な座席・飲食・眺めを提供・運営
→ 経済効果

↓

- 社会的意義:
都市と自然環境の「人のビオトープ」づくり

グッド・ハビタット (ヤン・ゲール先生談)

And this is the last one. I was listening to Prof. Gehl speak and I'd like to make this last point. Creating a biotope, creating a biotope for people. It's hard to understand, and Prof. Gehl suggested a good habitat is a better way of expressing it. Habitat is not familiar to Japanese. If I say human good habitat or human biotope, I think this comes close to what Prof. Gehl has in mind. I haven't been able to identify very clearly the concept yet so I haven't been able to explain this well, but so far this is the term I came up with.

Within the entire framework you should think about place-making. I think that is the take-away from this. Thank you very much.

Moderator: Thank you very much. The three moderators have given a report about the different sessions. In a way they're all talking past each other. I've been taking notes so you may think I have thought of questions to ask them, but there's not a question I can think about. But in view of the thrust of this symposium I'd like to confirm the import and objective of this symposium.

One point. On your envelopes it says the Ministry of Land, Infrastructure, Transport, the sponsor is the government. It's surprising, isn't it? It's the ministry that's sponsoring this conference. As to why, in my own way I have the following understanding. Traditionally, or in the 20th century, we had urban planning where local governments, the central government or the ministries were involved. The government would provide money and they played a certain role, and the target was such that there was a certain image of the target and what should be accomplished. Most probably this was the case.

For example, if we think about for what purpose would the local governments or government provide money or in what way could the government or local governments involve themselves in these projects? I think we've come to a stage where it's very difficult to come up with answers to these things. Prof. Gehl talked about certain cities where there's a lively environment and they are sustainable and health-oriented cities. Nobody would object to this. Everybody would think it would be nice to have a city such as this.

The government and local governments, the public entities, in what way can they participate in the building of these ideal cities? And perhaps the governments are struggling with that, the public entities are struggling with that. On the other hand we have private sector representatives here in large numbers, from what I understand. Those who are gathered here are here for different reasons. Maybe some have come because the ministry is sponsoring this but maybe the private sector is also struggling about the process and there are different ways of triggering things now and they are struggling with the vision that they should target.

And what should they work on to bring about what kind of outcome? There are no models for this. There is no model for this. So maybe people want to interact and conduct exchanges and that is the kind

of gathering this is, because there's a lack of template.

I said I was outside of the expertise of this conference. I am not even thinking about external environment; I'm just thinking about frameworks for buildings. How do you build buildings? That's my central concern. But in the past ten years or so, we are building indeed new residential buildings, but the days are gone when that was the main part of our activity. I think people share this feeling and I call this the box or building industry. We used to be the building industry.

So going forward, we say that this is an industry for places or industry for place industry. Or do we say place-making industry? That's the only thing I could come up with in English. So all of a sudden my business has come to have relevance to this place-making group.

I have had a long relationship with Mr. Shimizu and his company, and when I was discussing with different people, and I suspect that perhaps Prof. Gehl has an understanding of this, but just to be sure, let me confirm the following.

Japanese cities are such that in the local cities there are about 50 percent of cities where cars are dominant. Where there are buildings, these are small lots or land and small landowners own these plots of land and buildings. And if you look all over the world, this is very unusual. You have small landowners who have only one building. The small buildings in Kagurazaka, each building is owned by a different owner and if you want to make changes in the city you can't do this all of sudden. You have to convince all of the owners to bring about this change.

And you can't redevelop within a very short time period. Roppongi or Toranomon, in these places you can make changes. In the local cities you demolish buildings but you have only a small plot of land as a result of that. What can you do? Just grow grass. That's about the only thing you can do on this small plot of land you obtain.

So small landowners must take part in decision-making. And in addition to that, you have to make use of existing buildings, and so I'm involved in this process. I'm not suited to become a moderator. I talk too much people tell me.

But one question I'd like to put to all of the speakers here today is the following.

This is my own understanding, but the 20th century way of doing things is creating a vision. You talk about a vision. You project something into the future and you have an image of the objective and target and you have to show a vision. Twenty years from now, what will things be like? What will be like? Are we still engaged in this exercise? But the times are such that this kind of exercise is perhaps no longer effective.

When cities change, how do you bring about the change? How do you guide these changes? And how will this be managed by those who conduct a living there in a sustainable manner? The process is something which you can be more sure of. You can't show a vision. You don't know what the population will be like and you don't know how people will age during this process. And I don't want to say this, I'm the post-baby boomer generation and so I have been guided by the baby boomers, and the baby boomers when they're 80, when I think about what they'll be

like at age 80, I don't even want to come up with a vision for that anymore. There are a lot of things that I resonated with in the discussion that took place today, but public entities, if you say it à la Shimizu, you don't need subsidies anymore because Shimizu has large plots of land.

So the governors or the city mayors or the politicians or the representatives of the residents, how do you talk to them about what you want to do? How do you convince them? And how do you make them resonate? It's very important. And Prof. Gehl talked about the Moscow mayor. You saw his picture there on the screen. So if he decides something, they can get rid of all the cars. In Japan there are mayors and governors or there are city councils and assemblies, whether or not they resonate is a very major factor indeed, whether you can convince them or not.

Prof. Watari questioned Dr. Gehl about the following. What's the economic effect of all this? And Dr. Gehl responded that there is indeed an economic effect. So let me ask you the following. In what direction should the cities head? What's a favorable direction for the cities to pursue? Not a target but if you could give us a feel for how they will develop going forward.

Prof. Watari talked about the Main Street program and the eight keys to success. So how do you determine success? What factors must be fulfilled for success to happen? You can't convince people without showing that. So you're aiming for something and then you have to say, if this and this happens, it's a success. Is it getting people together that defines success? I'm becoming broad-brush because it's later in the day and I'm getting tired, but if you could talk about what I just mentioned. Please. Can you state your impressions?

Nishimura: It seems like I've been given a lot of questions. Well, just to respond to these questions, you talked about cars, and without new doubt , well, as Dr. Jan Gehl said, well particularly in local cities, we need to control car traffic, but in almost all cities we cannot just do it, and everybody is saying we need to control car traffic but you will be really beaten because there is no decision made and then it gets nowhere.

Moderator: So there are complaints from the residents?

Nishimura: Yes. And also politically speaking they cannot just make any decision and so we cannot just make any progress. And so those who have the breakthrough, I think they become successful, and so stopping car traffic, of course you will find it in other cities, then you are going to really make 180 degree turn from what you used to do conventionally, so it's understandable that people would really have objections and opposition to that.

And so you talked about vision, so ten years down the road and 20 years down the road, if you are really trying to give a vision, nobody would follow. And I think the keyword would be experiment. And each year how are you going to really have a sense of a difference made? And year after year we are accumulating experience for failing every year, and in the case of Saga, you have all these containers, and then placing all these containers would attract children. So after one year you are going to show the changes and differences, and then you are to share that experience with the local residents.

And I think this is sort of the Ex-Rent. And our

experiments were done on a singular basis but we have been doing this continuously for four years, and then the administration people could no longer say that is an experiment and so this is ongoing. And so I think this will become a more fixed type of activity. And so we have been looking down but how can we look up? And then every year we really have to have a sense of success even though it's on a small scale, and I think that's how the local city should move.

Moderator: Well, Nishimura-san, I think you can just run for politics. It's easy to understand and also I think it's believable.

So I'll just ask a more concrete question on that Waiwai exciting the container project. Was it the city government work that has been providing subsidies for four years? But the land, whose land was it, and also you really have to spend money to bring containers and also grow grass. That kind of spending or money, how is it funded?

Nishimura: This is a social experiment and the land is owned by private sector landowners and we are leasing the land, paying just about the equivalent money for property tax. And then the container is developed by a local construction company, and then just like leasing copiers, we have all these 300 kinds of magazines and comic books, and they are just for leasing them out. And general contractor people, you have all this depreciation period fixed for the copiers, and so businesswise they will be able to recoup the investment.

And also we have really mobilized the local residents to plant grass, and so it doesn't really cost much, but of course for the maintenance you have to spend certain money, but if this is really necessary, the town or municipalities can buy because out there in the suburban areas I think the downtown part is commercial places and so I think it's about time to really provide public places and then to have this kind of experiment so that the local community can be further mobilized. And so we really have to have those towns or municipalities purchase land if it is really necessary.

Moderator: And so Prof. Watari first, about chairs. Prof Watari on chairs.

Watari: What I want to say is close to what Nishimura-san has said. In cities you need cars and I think people should use both cars and bicycles. In Tsukuba where I live there's a bicycle road and so you take your car there and then when you come to the bicycle road you leave your car there and ride your bicycle, or you could go to cities using cars like Castro Street. There should be a park 'n' ride where you sit on these chairs or in the parks. If you combine all these, people come to enjoy bicycles and there will be more restaurants and so forth.

Little by little there will be changes and there should be administrative interventions to promote

this, and by accumulating these experiences… And have the media play up this experience. In Tsukuba there's a Tsukuba style which is a form of media, and Ibaragi Prefecture and the local government support this. Tsukuba is a big city so you have to go on a plane to have a bird's eye view of the entire city, it's very big, and we need to create books or magazines and guidebooks to indicate where the good restaurants are and where the recreational places are.

We thought there would be only two volumes of guides of Tsukuba City, but we've now published 18 volumes of these guides, so you have to make things visible to let people see. And in city assemblies there are lots of assembly members, and so you have to convince them all, but little by little you begin to convince the politicians as well, and if you accumulate these efforts, when the mayor or governor says something, things will start to move. Thank you. And use the media as well.

Moderator: Recently, I just happened to see the following. You or the urban renaissance entity was thinking about what to do about residential apartments for people sponsored by local governments, and there are fewer and fewer people and they've designated an apartment manager system where managers have decision-making authority.

And then there are companies which are related to the media which come up with very good ideas. I think this is a very good idea as well. Maybe they've produced something which is a size smaller than this, but apartments, living in apartments, local government-sponsored apartments, and they've created brochures and pamphlets for these apartments which are rather fancy and nice-looking, and I complimented them on this. And this was very popular. Initially they had questioned if these would be well-received but they were well-received.

When the media becomes involved people's responses change. You have to communicate what people think is good, and without this communication things don't start to move, but communication is very important. It has to be of good quality.

Watari: You use real sites, websites. To have real sites is very important.

Moderator: So the representative of Tokyo Picnic Club, Prof. Ito, please.

Ito: I said that in our second forum I reported to you the discussion, but because of the individuals I couldn't make a presentation, and although it may sound irrelevant, in the end it's going to link to this topic, so let me talk about my activity.

I produce the Tokyo Picnic Club activities, and if you look at the history of Tokyo a picnic is a place for interaction. There is development of the park, and from the early to mid-19th century there is a lot of development there. So within the city, how people interacted, we looked back at the history and tried to develop and promote such activity. In Tokyo we have fieldwork and we have a lot of picnic events that we hold in the daytime. We drink wine, that is what we do, that is the main thing we do. We do it in many places in Tokyo, and when we do that, there are many discoveries that you come to realize. And these are interactions with people, social interactions, where there is good public transportation, where easy access is assured. Those are the places we do that.

There's a big lawn in Hibiya Park which is accessible but it's prohibited to go on the lawn, so we want to do it in a fashionable and stylish way but it's very difficult to find good locations for these picnic events. We wanted to be more aggressive, more proactive in our activities, so we don't know whether we are able to do it certain places, but we try it anyway, experiment anyway.

Inside the garden of the courtyard of Tokyo Forum, no, and in the median place of main street, we were doing it when the traffic was blocked, but we were criticized for doing that. There are some places we could do it; some places we were not allowed. And so we have to attempt it anyway. But now our conclusion is that Tokyo's public spaces are very difficult to use, inflexible. And as pressure, our organization wanted to work to free up the use of public space in Tokyo, but that was too formal, so rather than that, we wanted to make picnic activities popular. That would be an easier shortcut we thought.

So picnic events were held. Not only in Tokyo but in the rural areas, suburban areas, larger cities, and Newcastle Gateshead in the UK invited us. Overseas we have held such picnic events three or four times. We were invited, picnic picnicians, we are called, experts of picnics. So at Gateshead we held a picnic event over ten consecutive days and so we identified good locations, each day a different location to hold a picnic event.

And the interesting thing at Newcastle Gateshead is that various people started to engage in it. For example, when we were close to the library, the librarians started to do reading of books during the picnics and artists conducted workshops for kites and the cafes or pubs that were surrounding that area said that we have lunch served usually but that can be taken away for a picnic and we'll provide that. They started offering that, and also a picnic basket, a gorgeous picnic lunch could be offered by certain restaurants surrounding that area. So various entities and people started to participate in the event, and that was very interesting and exciting, and we discovered many new things.

The urban planning people, the architecture world, when you are in that you lose sight of a lot of things, but we coordinate with a food coordinator for example, and from a different professional perspective the view of the city can be very different and we discovered that there are different perspectives. It doesn't have to be a picnic event; it is just a symbolic thing we are doing. But collecting ideas from different people and creating a place, there may be additional suggestions if this is a new idea for a new place that people can enjoy. People come up with different ideas.

Of course there is an inflexible type of situation in Tokyo in terms of sites, but also people's thinking is rigid. For example there can be movable chairs but nobody uses them. But if you try to be creative you can guide people into enjoyable events. People are inexperienced so at the beginning they may not be lured but trying to invite them, then once they experience it, not only the repeater participants but the neighboring shops start to show interest. They conventionally only invite people inside but now they are offering spaces outside of the shop to eat for example and that will lead to invigoration and lively activity in the park and that leads to greater business for the shops and the restaurants in the surroundings, and that leads to livelier public space

utilization. So that's the discovery through our events of picnics. So gathering different ideas from people, the mechanism to do that is what we provide.

And then I talked about the substance, and the essence of the city is interaction, and interaction leads to the emergency of places, and I think that is true. Not to set a big vision first, but by gathering people together people can discover different ideas and come up with their own ideas stimulated by others' ideas, and learn from each other and come up with new ideas, unique ideas. So that type of trigger is extremely important, and maybe that is a 21st century type of approach. That is a very picnic type of approach in my mind.

So what is the best approach? That was your question, right? What feels good the way we should take. That is I think your question.

Moderator: Prof. Gehl talked about activities, first designing activities and then space and then last is architecture. And regarding cities, this is the order in which we should think. I think it's a very important point.

And what Prof. Ito mentioned concerned looking at activities, and people have certain potential, so using the cities to give them a way to live in a more lively way so they can live more rewarding and affluent lives. You have to try to draw out the potential in people so that it comes to the surface. You sort of induce that. Picnics are such that there's a lot of room to do that through picnics. Is that what you've explained?

Ito: Yes, that is. There's no one that really dislikes picnics.

Moderator: I'm not sure. I'm not sure.

Ito: Do you dislike picnics?

Moderator: No, I don't dislike picnics.

Ito: Japanese like to eat. I think Japanese are really gourmands and they are greedy or they like food.

Moderator: Yes, picnics are good media to bring the potential out.
And you talked about containers, Mr. Nishimura.

Nishimura: I'm thinking about fields, not parks. Japanese urban spaces, they are such that it is prohibited, there are lots of regulations. It takes away and the space offered by the exciting Waiwai container is not fixed as a park so they can freely use them. And of course people need to assume their own responsibility in using them. You really have to, well, all these people will think of how to really well use these spaces and so eventually they will think about how they are going to use them, and then that would really make the community move forward.

And of course there should be some deregulation as to the use of the different sections of the roads, but once it could be done, and so then changing the red sign to a blue sign, and so not a red sign blocked vision but the green sign so that you can just go ahead. So that might be something we would be able to do and

Moderator: That's the slogan that we have to really well promote.

Ito: Last month I went to the New York Bryant Park and there were vertical signs out on the street,

and Japanese parks have lots of prohibition rules, but those said let us do this in a positive manner. I think that was very nice. Why don't we take a lot of photographs and take them home; that was one of the signs that I saw. And the lawns, use them as you like. And blankets, why don't you spread them out and enjoy a picnic, one of the signs said. But no plastic sheets, please. It said.

Moderator: Really?

Ito: So there are a lot of messages there on the signboards. Of course there are some negative prohibitions, but first of all it starts with you are welcome to something-something. So I think the way the message is written is a totally different direction or orientation, and I took a lot of photographs of that agreeing with that.

Moderator: Prof. Watari's chairs. I'm reducing Prof. Watari to just chairs, but emblematically, because Prof. Watari is very particular about chairs. Chairs are such that they induce, they are a tool to induce. It doesn't have to be a completed design. It's because it's not a completed design that people through their behavior create or give a certain form to the space.

Watari: Chairs were not used before because you need to manage chairs. In the past they were fixed in a certain place and you had to sit in a certain position but chairs are such that they're movable and you have to manage them.

And so what if these chairs are stolen and what happens if they're placed on the streets?
Well, Bryant Park does a very good job of managing chairs and so you shouldn't forget that – managing. And I think this could be done through self-management.

Picnics are such examples. There should be certain layers of management, and then chairs can be used very effectively and you can use them on the streets for cars or roads for cars.

Moderator: We still have some time.

I did have a lot of questions, questions suddenly come to mind. The direction of your discussion may be a little different from what I have to say. I think you find this in Saga or local cities, you have huge shopping malls or centers and then there are cinemas attached to them and parking space, and the shops are facing a very major road. It's one development pattern which exists even to this day. Not in major cities but in local cities you find a lot of these.

And earlier on there was mention of compact cities. What we're talking about, although there are some other things as well, but we're mainly talking about inside cities where historically people have become rather settled in these large cities, and then these

cities become old or people age and so we're trying to regenerate so that the place will become more lively. I think this was the central part of our talk today. These large-sized stores are very convenient.

Well, I'm full of contradictions. Well, I'm really very keen on visiting cinemas and so the lively atmosphere in these places, there are lots of children, and I would say if you like children you should go visit these places, and it's quite compelling to say that.

How do you relate to these big malls or are you aiming for something else? Could you compare what you're aiming for to these big malls and draw a comparison?

Nishimura: Well, I haven't shown the slides but in various parts we are going to scale the shopping spaces in suburban site. Well, the suburban type and inner-city type, the size is almost the same, and the inner city one is more flat and the suburban types, they are just located within walking distance and so they have really come up with this scale.

And so you are really walking the whole day going up and down and then enjoying walking, and then you will also have dinner while there, and so probably in the inner city with a safer environment I think people will get to walk more, and so that is the reason we are creating this open field. And what is happening in Saga City, we are trying to maintain schools within the city because we have all these kids coming to the containers because their school is located very close to the containers, and in the past they just went out to the suburban shopping malls, but the school is located very close to this container.

There is consolidation ongoing for the schools, but definitely you really have to maintain the primary schools as well the kindergartens at the center of the city and town; otherwise the town will be just deserted and so in Saga we do have a concentration of primary schools and the primary school kids come to this, and then because of that they are going in to lead the town or community development ten years or 20 years from now. So you really have for the children coming.

Moderator: You are really convincing. I don't know why but you are so convincing it sounds like. And the same question to Prof. Ito.

Ito: Place-making, the significance and value of place-making, I think it is relevant to that question. The economic effect and also the ripple effect on the surroundings, that is important. But in the long-run, recognition of the diversity of the city is necessary and also how do you create the social interaction and civic pride and creativity from that? We cannot judge those elements in the short-run. Those have to be assessed in the long run, how you are able to develop those abilities.

In the second forum there was mention about how there were a lot of unique people, strange people out there on the street, and that was a good characteristic of the cities, but in the shopping malls you don't see those people who are out-of-the-box and unique, but out on the streets you see them, and I think it is healthy to have all these different people, very unique people.

But in Tokyo, on the trains, it is jam-packed and you have to shut out your view. There are many people around you but you try not to look at them and you are not stimulated by the diversity. But if

the density of the population is at an appropriate level you are able to notice those differences amongst different people and the uniqueness in people. And now we are in the era of the internet and shopping malls, you can contain yourself within a limited amount of information, and the big tolerance or diversity of the city I think is shut out from the current world.

When I was on a bus in Berlin there was a wheelchair person coming on the bus and the senior high school student quite naturally actually got out the ramp for the person to use to get on the bus. I never saw such a scene by high school students in Japan. And of course I don't know how to do that either but the diversity, knowing and recognizing the diversity is very important when you live in a city. And in the long run I think that will reduce or minimize social cost. A mutual help type of attitude can be developed and I think that will lead to less social cost.

And also with regards to creativity, are you able to be creative about something? For a shopping mall there's no room for creativity, there is no room for your self-expression, but in the city, on the streets, there is mention about the Waiwai Container Project, but there is flexibility, freedom for creativity of your own. I think that is different.

Moderator: Thank you. Prof. Watari, please.

Watari: I think there are different ways you can go about it. I tried something in the past where you take a big shopping mall and then there are lots of shopping stores surrounding it, and you gather the owners of these shops and open up a parasol shop, so you bring these little shops around the mall, but there's a limit to what you can do. The original main street shops do not really understand fully.

So you have the large shopping mall people go to the place, and now shopping malls have huge parking spaces, so you attach parks, you open up parks adjacent to the parking, and you attach the park to the parking space, and then there will be interaction. In Sendai we did such an experiment, where you open up a park next to the parking lot and you induce interaction.

In shopping malls you have large supermarkets and little shops. You can disband them altogether and have them merge with the shops on the street and you can create a street-type of mall. In Silicon Valley they did this, and what's important is you manage it properly. The area management has to be done properly, and you include streets and parks, and you manage all of this together, and then you add a place-making function to that. I think it boils down to these three points.

Nishimura: May I? I just recall talking about suburban shopping malls, why is it not good to have these suburban shopping malls and the large-scale shopping centers or shopping malls. And they just said that they occupy the same floor space but once they close them they would just go away,

And the inner city, if you have all these shopping malls, even though one store is not doing well, then there are others coming in, and then so there are so many different things ongoing and so there are redundancies. So if you have this big physical box or building and if you are dependent on one singe business operator, well, it would not be viable.

And so once again we really have to dedicate our efforts to rebuild the aggregate of these different

stores and others.

Moderator: Thank you. It's about time. Or rather, three more minutes to go. So wrap up.

I don't need to summarize this, do I?

I could summarize. Well, what I mentioned initially, that MLIT is sponsoring this and we have private sector people gathered here, and everyone is trying to think about certain problems that they are dealing with. Perhaps we could not answer all of these questions on people's minds but what we just heard is related to the question I had. There was a time when we were thinking in static terms. We would think about a completed blueprint, and then when buildings were completed that was the end, you've completed it. But those days are gone now.

And in terms of timespan, how do we evaluate it? In the short run we evaluate it so-and-so, in medium term we evaluate it differently. And children grow up, and so we evaluate it after they become adults, we evaluate things differently. So what timespan are we thinking about in terms of evaluation to encourage sustainable cities? What timespan are we talking about in terms of lively cities? What is the timeframe we have in mind? I think changes take place to make this happen, but with regard to cities, the decision-makers or the people who are trying to make investments or the people who engage or become involved in this process, what do we show them? There is no model or there is no template for this, so we have to be very detailed about the time factor, the schedules that we consider. As one out of this field, I am just hoping that I have given you new food for thought.

So the time is up, and the three speakers taught me a great deal. Dr. Gehl's keynote speech and the two speakers who spoke after that, I think all the speakers have spoken about very relevant topics. Let us go out drinking and discuss this over a drink after this. There are lots of things that I want to know more about. I still have to be convinced further, and I'm sure the moderator will be talking about this. Perhaps Dr. Gehl, we could have a comment from you about the discussion that has taken place.

So I'd like to conclude the discussion between the three speakers and myself at this point.

Comment about the Symposium

Jan Gehl:

Yes, thank you very much for this invitation, and thank you to all of you for a very interesting afternoon. I have learned a lot and there was a lot of things which could be inspirational for people in other parts of the world. And I think that the very fact that these three symposiums, or four, have been conducted and the fact that we are here and all the things we hear, it's a very good sign. Also a good sign is that the ministry is organizing this because that shows that there is a growing interest in the public realm and in these issues of city quality in Japan. I think this is a very good sign.

I think that when I look back at Denmark and what I learned in my own country, that is something that over the years the mindset has been changed for everyone, from the prime minister to the youngest little student, where some years ago most of the minds were very technocratic about having more cars and building more buildings, whatever, but gradually it has been spread the notion that we are not doing this to make the buildings happy or to make the cars happy but we are building the cities to make the people who occupy the cities happy.

And we have seen this mindset and I showed you some examples of even the architecture policy of Denmark now has, putting people first. This is a novelty because what I tried to explain in my presentation was that with the modernism we started to do things in a completely different way from anything which we have done throughout the history of human settlements, and we started to put down the buildings first, and then when the buildings were there, we looked out of the window to see if there was some space left over and then maybe we asked the landscape architect to do some landscaping. Then we looked out again to see if there were some people enjoying it and found there was nobody.

And so it was mentioned here, in this book of mine, I put very much emphasis on saying that we changed the way we built the cities at that point by doing the buildings first and then the spaces and then perhaps a bit of life. Throughout the history of human settlements we did it the other way around. We had some functions and something happening in the settlements and then we built some spaces around this and then we put the buildings over to these spaces or we formed the spaces with the buildings so that we had life, space, and buildings, as a way, we did things throughout history, and that was caught by the modernist, and many ways, I think we spent 50 years to find out more about people, there was a lot known about people before that, but everything was thrown out and forgotten.

And then we had painstakingly to find a lot of evidence and then put this forward and say that in many ways there were many good things in the old cities and we can learn a lot from the old cities because they were made of people for people. Then we had all these 50 years of crazy planners who did all these object-oriented or traffic-oriented planning, but we forgot some important thing: that is that we have to make it so that people from all generations, from the youngest to the eldest, would have a good life and would have livability.

And maybe I should end this by telling some years ago I had a 50-year anniversary with my psychologist wife and we were able on that occasion to do a little bicycle tour of 20 kilometers that evening where we were able to bicycle side by side, and we were elderly people, but we were able to bicycle around in Copenhagen and have a nice meal at a sidewalk café, and then we bicycled back, and then we had done 20 kilometers. And then we sat and talked about that such an event, such a way of experiencing your city and seeing all these nice things, that was not possible when we were married. It has happened over the years, and that made me think about, I have this feeling that for 50 years, every morning when I woke up the city was a little bit better than yesterday, and that is a very good feeling to have because that means that maybe my children will live in a city which is a little bit better than it was 20 years ago and my grandchildren will maybe have an even better place to live when their time comes to grow up and live in the city.

And I also know now a lot of cities where you are sure that every morning it's a little bit worse than yesterday, and of course when all this is being discussed here, I do think that the major problems of cities are not in Europe or in America or in Japan, but in the fast-growing cities in the developing countries, but that's a completely other story. But my point of departure has been to take a closer interest in how Homo sapiens organized their settlements throughout history and finding out that this disruption of 50 years has happened and now we know enough to do much better cities than we did ten years ago and 20 years ago.

I do think that the very fact of organizing these symposiums is a very nice sign that things are developing very nicely, and I congratulate you on these symposiums, and I thank you once again for inviting me to hear about what is going on over here

So on behalf of Brigitte Svarre and myself, thank you very much for today, and good luck making the cities better tomorrow than it is today, every year. Then the answer of what will it be in 2030 would be easy: it will be better. Good luck.

補助金に依存しない自立的・継続的な公民連携まちづくり活動の更なる展開を図るための基礎的調査

報告書　別冊資料

平成 27 年 1 月

発　　行　　国土交通省　都市局　まちづくり推進課
連 絡 先　　〒100-8918
東京都千代田区霞が関 2-1-3
電　　話　　03-5253-8111（代表）
Ｆ　Ａ　Ｘ　　03-5253-1589

調査受託機関　　㈱日建設計総合研究所
東京都千代田区飯田橋二丁目 18 番 3 号